

高崎市文化財調査報告書第141集

真町Ⅰ遺跡

高崎駅周辺(西口)土地区画整理業業
に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)

1996

高崎市教育委員会

序

高崎市は、古代には東山道、中世になると鎌倉街道が通り、また、近世においても中山道や烏川の舟運など、交通の要衝として栄えて来た都市であります。現在は、関越自動車道や上越新幹線に代表されるように北関東の交通の拠点的都市となっています。

高崎市は、西暦2000年には市制100周年を迎え、市内各所においては、区画整理・都市再開発事業・道路整備事業などが盛んに行われています。

しかし、こうした事業が推進される中で、埋蔵文化財は消滅の危機に直面し、開発に伴う発掘調査も多くなってきています。発掘調査は、その性格から一度しか行うことが出来ないことであり、慎重に対処しております。

本書で報告します真町Ⅰ遺跡では、江戸時代の城下町を区切る大きな堀跡と武家屋敷の跡などを発見しました。さらに下層には、平安時代末の浅間山の噴火で埋没した水田跡と、平安時代初め頃に起きたと推定される洪水に埋没した水田跡が存在していました。今回発掘調査した資料が、今後の地域史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本遺跡の調査に多大な協力をして下さった諸機関並びに関係各位に対し、心から感謝いたします。また、猛暑の中で作業に従事して下さいの方々に御礼申し上げます。序と致します。

平成8年3月

高崎市教育委員会
教育長 網 中 正 昭

例 言

- 本書は、高崎市都市計画事業高崎駅周辺（西口）土地地区整理事業に伴う歴史文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、高崎市教育委員会が実施した。
- 発掘調査期間 平成7年5月19日～平成7年9月14日
- 資料整理期間 平成7年6月2日～平成8年3月29日
- 調査場所 高崎市真町50,52,54,57,63,64番地。
- 調査面積 1518㎡
- 事務局 神戸聖路 村井雅明 茂原久美子
- 調査担当 関口 修 神戸肇
- 調査参加者

- SB 建物跡 SD 溝、堀跡 SE 井戸跡
- SK 土坑
- 遺物館の縮尺は、4分の1を原則とした。図の左は外側、右側は内側である。拓影も同一であるが、4枚の拓影がある時、左は上が外面、下は外底面。右は上が内側面、下が内底面である。
- 遺物の法量は、最大幅を計測した。
- 遺物は通番とした。図と写真の番号が一致している。
- 遺物の幅、深さは最大データである。
- 土層及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」（1987年版）を用いた。
- 図面・遺物等は、高崎市教育委員会が保管している。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 発掘調査の実施と経過

- 第1節 調査の経緯
- 第2節 調査の方法

第Ⅱ章 立 地

- 第1節 遺跡の地理的環境
- 第2節 遺跡の歴史的環境

第Ⅲ章 検出した遺構と遺物

- 第1節 X層下水田跡
- 第2節 浅間B軽石下水田跡
- 第3節 浅間A軽石再堆積下遺構
- 第4節 近 世
- 第5節 近 代

第Ⅳ章 真町I遺跡の自然科学分析

- 第1節 真町I遺跡の地質とテフラ
- 第2節 真町I遺跡の植物体炭素分析

第Ⅴ章 調査の成果と課題

- 1 X層下水田跡について
- 2 浅間A軽石再堆積下遺構について
- 3 「遺構」と高崎城二ノ丸堀の類似性
- 4 近世の遺構と遺物の傾向

写真図版

- 土屋喜美 森田秀策 中村茂 茂木渉 高崎市史編纂室
- 高崎市教育委員会遺跡番号は264である。
- 遺構図中の北マークは、国家座標第Ⅷ区における座標北である。
- 調査位置図及び遺跡図は、高崎市発行2,500分の1地形図及び20,000分の1高崎市全図を使用した。
- 遺跡の土中に見られるテフラの給源火山と推定年代、及び遺構図中に使用した遺構略号は次の通りである。
- As-A 浅間山噴出テフラ（天明3年、1783年）
- As-B 浅間山噴出テフラ（天仁元年、1108年）
- Hr-FA 榛名山二ツ岳噴出テフラ 6世紀前期
- Hr-FP 榛名山二ツ岳噴出テフラ 6世紀中葉

第Ⅰ章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査の経緯

1 調査に至るまで

高崎市は、特に交通面から重要な位置にあり、その優位性から高崎に拠点を置く企業が増加し、高崎駅周辺部は大規模な区画整理事業と高層ビル建築が進められている。

高崎のまちには、近世には高崎城の城下町として栄えてきた。本遺跡の所在する真町の東側は、道路が南北方向に走る。この位置には、近世には城下町を区切る「遺構」と呼ばれる堀めぐっていたとされる。区画整理事業の計画では、「遺構」が存在する可能性のある道路の両側を拡張することであった。区画道路は真町内部にも通るが、真町は下藤武士の居住が推定され、発掘を通じた過去の解明が重要課題である。担当課と協議を重ねたが、事業は既に進行中で事業の変更は不可能であり、高崎市教育委員会では発掘調査を行い記録を保存することで合意し調査を開始した。

2 調査の経過（日誌抄）

平成7年5月19日 調査開始 5月23日 掘削開始 5月25日 1区表土剥ぎ、3区調査。3区において幅広い堀を確認。 5月26日 1区で池状の施設確認。 5月31日 1区の池状施設（SD2）調査、底まで粘性の強い土が堆積。 6月12日 3区上層調査、溝、土坑検出。遺構の堀が埋没した後の遺構と見られる。 6月20日 5区調査開始。 6月27日 3区上層調査開始、遺物取り上げ。掘器には19世紀になって現れる欠けた部分で補修した焼物の破片が多い。5区で掘立建物跡確認 SB1、天目の噴火以前のものとされる。 6月28日 3区SD1「遺構」調査開始、馬の骨、歯出土。 6月30日 SD1底までを調査。木簡出土。 SD1は南北の堀であるが、それに直交するように堀底に畝状の高まりが連続する。 7月4日 3区西で洪水に埋められた水田跡検出。浅間B軽石よりは下部である。Hr-FPないしHr-FA以降で火山灰をかなり含む洪水の可能性あり。 7月7日 1区SD2調査。土止めの杭及び横木を取り上げる。 7月11日 1区でSD1「遺構」調査。堀底にはやはり堀に直交する畦状の掘り残りあり。犬と見られる頭骨出土。堀の下部は粘性の強い堆積物。堀の中上層も水成堆積、土層の崩れと見られる層あり。 7月18日 2区上層、近代の土坑、溝検出。 7月25日 5区土層部分の精査、土層の盛土一部残存。土層部分は当時の地表であるB軽石混じりの層を、ややたい洪水土まで掘りくほめている。 7月26日 土層部分で土坑SK25検出、南壁検出。 7月31日 2区でSD1調査。5区浅間B軽石下水田跡。 8月4日 5区で洪水下水田調査。洪水層中より9世紀の赤焼きの須恵器出土。洪水は9世紀のものか。 8月9日 4区調査、近代遺構多い。 8月18日 5区北の壁から近世の柱列検出。SB5とする。 8月22日 4区SD1「遺構」調査、堀底は田圃の畦状である。 9月4日 6区調査、A軽石下で濃ないし銀灰検出。 9月7日 6区浅間B軽石下水田跡調査開始。 9月12日 洪水下水田調査、土器は9世紀主体。 9月14日 発掘調査終了。以後整理・報告書作成。

第2節 調査の方法

調査地点は、調査以前は最近まで商店が建っていた。調査場所は、現在使用されている道路の拡張のため、幅は非常にせまい土地である。また真町内の調査部分も幅がかなりせまい。よって、調査区を北から1～4区、真町内道路予定地を5区、通りの東部分を6区と名付け、分割して発掘調査を行うこととした。

調査にあたっては、調査区ごとに直横で表土剥ぎをし、土砂は他の区画に置いた。その区画が終了した後に埋填し、次の調査区に移動した。なお、遺跡地は「遺構」、堀及び水田跡の存在が予想され、湧水も多いと見られた。よって、仮設電柱を設置し、排水を行った。測量にあたっては、国家座標並びに水準点を乗者に杭打ち委託した。平面図は1/20ないし1/40の縮尺で、地形図並びにエlevation図は1/20の縮尺とした。写真撮影は35mmリバーサル並びにモノクローム、カラープリントを併用した。

第3節 基本土層

下図は本道路の基本土層である。表土(Ⅰ層)は薄く、下部には焼土と炭化物を多く含む。真町は明治以降火災が多かったといわれているが、この層に含まれる焼土は、火事によるものである可能性が高い。Ⅱ層は、石炭の燃えかすである、いわゆる炭殻層が殆どであり人為的な堆積土と考えられる。Ⅲ層は、褐色でA軽石(As-A)の二次堆積物を多量に含む。Ⅳ層は褐色の砂質土層で、A軽石(As-A)を少し含む。Ⅴ層は、As-Aを多量に混じえる土層である。この層の下部では、5区の西で部分的にAs-Aの純層が認められ、6区ではやや厚く攪拌されたA軽石が堆積している。なお6区は他と違ってⅤ層の上及び中層にA軽石は少ない。Ⅵ層は、B軽石(As-B)がかなり入る。5区のSE1は、17世紀末から18世紀前半の陶磁器が出土しているが、このSE1は、この層(Ⅵ層)の直下で検出したものである。よってⅥ層の下部は、近世初めから中頃の面と考えられる。Ⅶ層は、天仁元(1108)年噴出と、史料の上から推定されているテフラである(As-B)。最上部はやや攪拌を受けている。Ⅷ層は、その下部にあるⅨ層が腐植した層であり、かなり攪拌が認められ、Ⅸ層(As-B)の下の水田土壌と考えられる。Ⅹ層は、全体に黄色みを帯び黒色土ブロックを少し含むシルト質の層であり洪水起源と考えられる。Ⅺ層は、やや灰色を呈した粘性のある土で、幾分黒ずんでいる。Ⅻ層は黒褐色の粘土質の土で、攪拌されたC軽石(As-C)を含む水田土壌と考えられる層である。Ⅻ層は、旧石器時代の井野川泥流堆積層が主体である。やや黒ずんだ粘性を持つ土で、幾分やわらかく二次堆積層と考えられる。この下部には、礫を主体とする灰白色のやや堅い層がある。

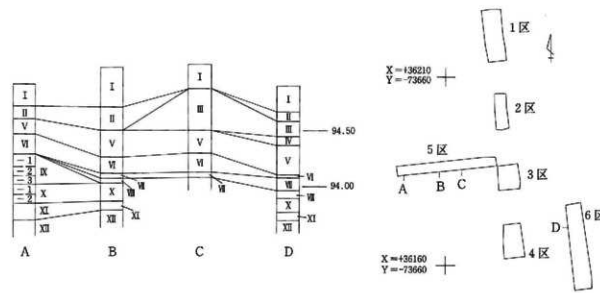


図1 基本土層図

- Ⅰ層 10YR5/4 に近い黄褐色、砂質土。焼土や炭化物を含む。
 Ⅱ層 10YR2/1 黒褐色、炭や灰が主体。炭殻層。
 Ⅲ層 10YR5/1 褐色、浅間A軽石(As-A)の二次堆積物を多量に含む砂質土。
 Ⅳ層 10YR5/1 褐色、浅間A軽石を少し含む砂質土。
 Ⅴ層 10YR5/1 褐色、浅間A軽石を多量に含む。A軽石の割合が少ない所は粘質土となる。5区の西側最下部にはA軽石の純層がある。
 Ⅵ層 10YR3/3 暗褐色、浅間B軽石(As-B)の二次堆積物を多量に含む砂質土。
 Ⅶ層 10YR4/1 褐色、浅間B軽石純層。(As-B)
 Ⅷ層 10YR4/1 褐色、粘質土。粒子が細かく腐植した土層。
 Ⅸ層 10YR4/1 黄、シルト質。軽石が少量含む。黒色土ブロック少し含む。
 Ⅹ層 10YR5/4 に近い黄褐色、シルト質。軽石が少量、黒色土ブロック少し含む。
 Ⅺ層 10YR2/2 灰黄褐色、シルト質。Ⅹ層より色が濃い土層は似ている。(A地点、古墳地サンプル1)
 Ⅻ層 10YR4/1 褐色、シルト質で幾分粘性があり黒色土ブロック少し含む。(A地点、古墳地サンプル2)
 X-1層 10YR4/1 褐色、X-1層に似る。やや色が濃い。(A地点、古墳地サンプル3)
 Ⅻ層 10YR3/1 黒褐色、粘土質。腐植している。攪拌された状態、浅間C軽石(As-C)を含む。(A地点古墳地サンプル4)
 Ⅻ層 10YR4/2 灰黄褐色、粘土質や砂礫を含む。井野川泥流堆積層腐植層。

第II章 立地

第1節 道路の地理的環境

真町Ⅰ道路は高崎駅から北西100m程の位置にある。付近は高崎駅西口に広がる商店街で人通りも多い。道路地から西に1km程の位置は近世に高崎城のあった場所である。高崎城址すぐ西側は烏川の崖であり標高97m程度、真町Ⅰ道路では約95mである。烏川の崖近くから真町Ⅰ道路にかけては幾分低くなっている。真町Ⅰ道路から東に向かって上越線を越えた場所に東町道路がある。この付近一帯は、かなり低く土地で、最近までは水田や湿地が広がっていたとされる。本道路(真町Ⅰ道路)は、烏川に近い付近に広がる微高地から、低地への変換点と考えられる。

第2節 道路の歴史的環境

本道路(1)道路周辺の基盤は、1.1~1.3万年前に起こったとされる井野川泥流堆積層、その下部には前橋泥流層がある。付近は低地であったため、旧石器時代の遺構・遺物は検出されていない。縄文時代では、微高地上の高岡前遺跡(2)で中期と後期の土器片が出土している。弥生時代は、高崎城三ノ丸遺跡(3)(第7次調査)では、中期後半の環濠集落の溝が発見され、内部の位置となる第5次調査(4)では、大型の方形周溝墓が発見されている。竊馬場遺跡(5)では、中期後半の土器が出土し、高岡城前遺跡(6)は、環濠と見られる溝が発見され、中期後半の土器が出土している。また、すぐ北の高岡東沖遺跡(7)では、中期後半の住居跡が調査されている。後期の集落は、高岡村前・高岡村前Ⅱ遺跡(8)に調査例がある。上中層辻東部Ⅱ遺跡(9)では古墳前期の方形周溝墓が2基発見されている。古墳時代集落は高岡村前・高岡村前Ⅱ遺跡で、奈良・平安時代の集落は高崎城三ノ丸遺跡で調査されている。東町Ⅳ遺跡(10)では8~9世紀に起こったと見られる洪水水田跡を検出している。平安時代末(1108年)出現浅間B軽石で埋没した水田跡は、栄町Ⅰ遺跡(11)、東町Ⅰ~Ⅴ遺跡などで発見されている。高崎城址ノ木部遺跡(12)では、中世の地下式土坑や井戸跡などが検出されている。近世は高崎城内部で第13次調査まで行まで行われ、次第に城内の様子が判明してきている。当時の生活をしのげる遺構・遺物が膨大である。第5次調査では三ノ丸の土器の調査を行い、それより内部となる二ノ丸の堀は第9次調査で調査している。上幅17.5~18.7m、深さ4~4.5m程度と大規模である。堀底には、障子堀とよばれる施設が認められた。城下町の調査は松崎町遺跡(13)、高崎城下町遺跡(14)などがある。

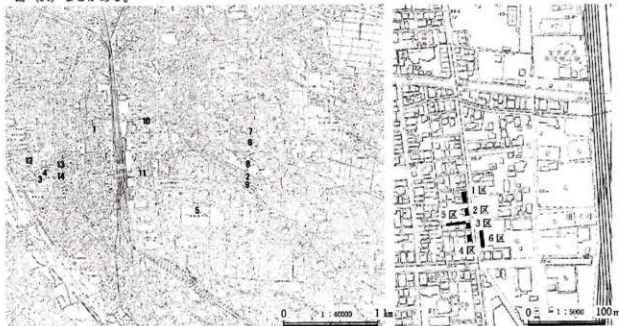


図2 周辺の道路図

図3 調査位置図

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 X層下水田跡

3区・5区・6区ではシルト質土壌下から水田遺構を検出した。浅間B軽石より下部で、榛名山二ツ岳噴火時の土砂をかなり含む層である。この層は3・5区では大きく2層に分かれる。上部は、にぶい黄褐色のシルト質土壌（IX層）で、下部は上層よりやや黒ずんだ褐灰色のシルト質でやや粘性をもつ土壌（X層）である。6区は全体が褐灰色の粘性を帯びた土であるがかなり腐植している。5区ではX層下部の土壌と水田遺構を検出した黒褐色土壌の間に、部分的に桃白色のテフラと見られるブロックが認められる。5区では水田遺構を覆う上部洪水層の下部で9世紀段階の酸化塩地成の須恵器片が出土している。また、5区の東となる6区の水田跡を覆う層は、3区や5区では、下部に位置しそれに対応する層（X層）と考えられる。6区では、水田跡を覆う層の中から、8～9世紀に位置づけられる土師器の甕の破片や、須恵器の坏・壺の破片が出土している。

5区は北西端が標高93.89mと一番高く、東南端が93.80mと北西から東南への傾斜をもつ。調査区の東で、南北走向の畦を検出した。畦の方向は北7度西である。畦は下幅で70～85cmを測る。畦の上面は、西の水田面とほぼ同じ高さであり、この部分で段を持ち東の水田面となる。この部分で5cmの比高差であり、東の水田面が低い。図には、畦のすぐ西に南北の溝を描いているが、これは後世の溝跡で水田とは時期が異なる。畦の西方の水田面はフラットであり、あまり凹凸がない。足跡も殆ど検出できなかった。それに対し畦の東側はやや凹凸が見られ数カ所で足跡が確認できた。

検出した畦の西側では、フラットな部分が幅20mも続く。その間に畦らしい高まりはない。5区で確認された畦も西の水田面と同じ高さである。なお、古環境研究所による資料採取地点A地点は、この畦のないフラットな部分であるが、イネのブランドオーバーの値は高い。この部分では、水田面が削平されていると考えられる。

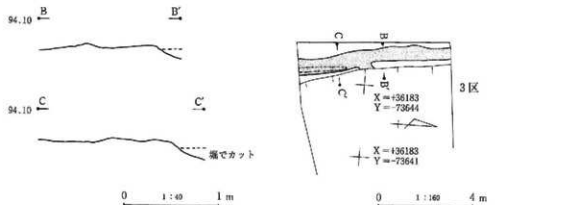


図4 3・5区X層下水田跡図

3区でも、X層直下で南北走向の畦とそれにT字形に交わる東西方向の畦を検出した。南北の畦は北11度西を向き、下幅50～65cm高さ5cmである。一方東西方向の畦は、南の部分がSD1掘削の時に削られており幅は不明、高さ4cmである。なお、南北畦の南部にある溝は、洪水層よりも上面から掘り込まれたことが確認され、近世の溝と考えられる。南北畦の東はおおよそSD1の掘削時点で、削られ水田面の状況はわからない。それに対し畦の西側はやや凹凸があり、足跡も確認できる。この位置での水田面は北が93.78m、南が93.76mと北がやや高い。なお、この3区で検出した畦の西側の水田は、5区の東側の水田と連続する可能性が高い。



図5 3区X層下水田跡図

6区でも、X層下の水田跡を検出した。調査区の長さ約23m、幅約5mであるが、畦畔によって区画された7枚の水田跡を確認した。調査区北西隅の水田面の標高は93.810m、北東隅は93.813m、南西隅は93.728m、南東隅は93.728mである。また、調査区中央付近は93.798mであり、北から南にかけてかなり緩やかな傾斜である。水田1枚に注目すると、東西方向が殆ど平らであり南にかけて幾分傾斜を持っている。北では北3度東、南では北10度西とややカーブを描くものの調査区の西側にほぼ北を向き筋の通る畦があり、これを基準とするように東西畦が設けられている。北では、西と東の東西畦は、ほぼ東西方向に向く。中央では、東の東西畦は、概ね東ではあるが若干弧を描く。南は、緩やかにカーブしながら東北東に向かう。北西から、水田番号を1～7番とすると、3番水田の北と南の畦の頂点間の距離は7.7m、4番水田では北と南の頂点間は7.7～8.0mを測る。また、6番水田では7.1～8.6mである。調査区の幅が狭いため、水田1枚全体の大きさを知ることが出来る場所がないが、水田面の東西方向の標高がほぼ等しいことから、水田は南北方向のかなり小さな長方形と推定される。

畦は明確に検出出来ず、畦状の高まりを追って畦と認定したものが多い。よって、畦の高さは全体に低い。2番・4番水田の西畦である南北畦では、下幅0.5～0.8m、高さ0.7～8.5cmとかなり低い。4番水田の北畦は、幅0.7～0.75m高さ1.9～2.7m、4番水田の南畦では、幅0.8～1.0m、高さ2.7～2.9m程度である。また、6番水田の南畦は、幅0.7～0.8m高さ1.2～1.5cmである。

水田面は、踏み込みによると見られる凹凸がや認められたものの全体的に平坦な部分が多い。これは、X層下部が、完全にバックされた状況ではなく後世の耕作のため、水田面がかなり削平されているためと考えられる。畦がかなり低いのも削平によるものと考えられる。

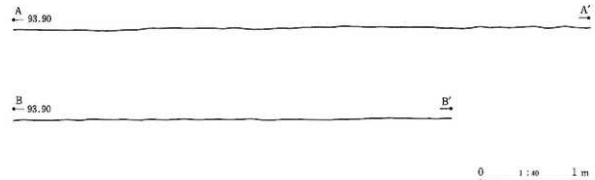


図6 6区X層水田跡エlevation図

第1章 検出した遺構と遺物

出土遺物には、須恵器・土師器・土師器・土師器などがある。水田面及びX層下部での検出である。3の須恵器は9世紀初頭、6の土師器は8世紀代であろう。また、10の土師器は、頸部のコ字状が認められ9世紀段階と見られる。土器は全て小破片であるが8～9世紀である。

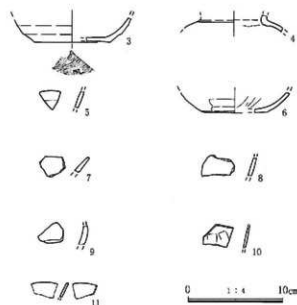


図7 6区X層下出土遺物

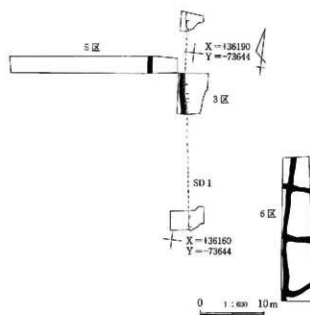


図9 X層下水田跡全体図



図8 6区X層下水田跡図

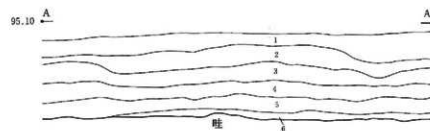
第2章 浅間B軽石下水田跡

第2節 浅間B軽石下水田跡

天仁元(1108)年噴出とされる浅間B軽石下の遺構を検出した。1～4区まではSD1に伴う、土器構築時に浅間B軽石及びその下部の水田土壌が削平されており、遺構の検出はできない。遺構が残っていたのは5区及び6区である。5区では東方から6m程は、土器構築時に削平されている。遺構を検出したのは、その西部である。5区の中央で南北走向の畦を1本検出した。畦の向きは北1度西である。畦の下幅45～50cm、高さは5cm、断面が台形でしっかりした畦である。この畦がある位置から7m程西では高台となる。水田面と高台との比高差は約20cmである。この高台の部分は浅間B軽石もその下の水田土壌も存在しない。なお、高台と水田部分の変換点では、土をカットし東側を水田化したと見える。その様子は地層断面でも観察できる。この部分が水田域と居住区の境界であったと考えられる。

5区では地形が東に向かって傾斜している。畦を検出した西側の水田では、西端が標高94.10m、東が94.09mとゆるやかな傾斜である。また畦の東側の水田は西が94.09m、東の土器カット部分に近いところは、94.06mである。

5区の浅間B軽石下水田土壌は、下層の洪水堆積物が腐植化した土である。粒子の細かいシルト質土壌で砂礫は殆ど含まない。水田面には、浅間B軽石面まで及んだ、近世と推定されるのビッドが多いが、水田面全体を擁持するような後世の耕作の様子は認められない。水田面は、浅間B軽石降下時には、起伏が少なく足跡も殆ど残っていないと考えられる。



1. 表土
2. 灰質、砂質土。A軽石含む。
3. 灰質、砂質土。A軽石多量に含む。
4. 灰質、砂質土。A軽石多量に含む。上層よりやや砂質。
5. 黒土、砂質土。B軽石主体。(近世の畦)
6. 近い黄土、B軽石純層。

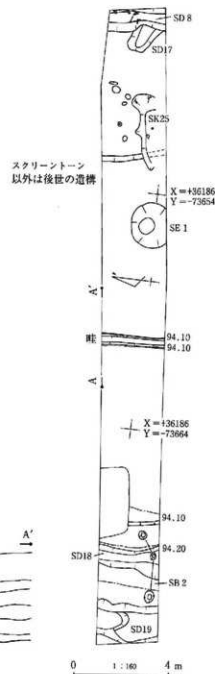


図10 5区浅間B軽石下水田跡図

6区でも、浅間B軽石の残存状況はよく一次堆積の状況を示している。ほぼ東西走向の畦畔を2本検出した。二本の畦畔は平行しており、畦の頂点で測るとその間隔は7.7~7.8mである。北の畦はその北8.5mまで、南の畦はその南7mまで畦はない。調査区の北西の水田面の標高は93.968m、北東は93.953m、調査区南西隅は93.901m、南東は93.891mであり、北西から南東にかけて緩やかな傾斜を持つ。畦畔は、北は幅0.4~0.7m、高さ2.7~4.2cmでありならかな三角形をしている。南の畦は、幅0.4~0.8m、高さ3.8~5.3cmであり上面が丸い台形を呈する。水田面は全体的に1~3cm程度のくぼみが多く、凹凸が激しい。しかし、形のはっきりした足跡は少ない。

水田面全体に、人が入ったと見られるくぼみは認められるが、むしろ踏み込みのはっきりした足跡は、畦畔の上部及びそのそばに多い傾向にある。例えば南畦畔の東半部には深さ4~5cm、西半部には深さ1~2cm程度の浅い踏み込みがある。畦畔の頂点は、殆ど同じ高さであり、水口としての切れ込みはない。また、6区の調査区は5m程度の幅であり、水口の有無は明らかにしない。水田土壌は、やや粘質のある黒褐色土壌で、下部の灰黄褐色土が腐植化したものである。水田面からの出土遺物はない。なお、調査区北には、中世以降と考えられる土坑がある。また、図の小ピットは近代以降の杭跡である。

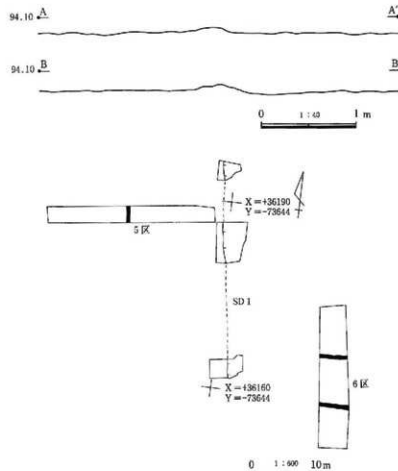


図12 浅間B軽石下水田跡全体図

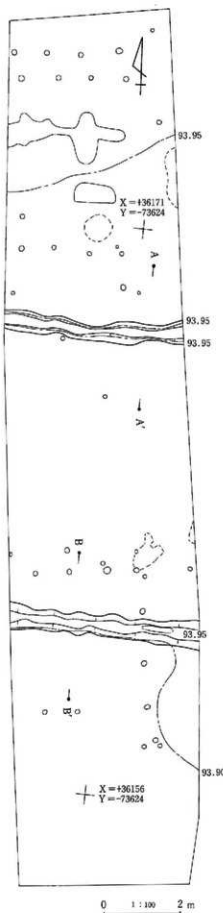


図13 6区浅間B軽石下水田跡図

第3節 浅間A軽石再堆積下遺構

6区は浅間A軽石主体のやや攪拌を受けた土が厚く堆積していた。東の旭町I遺跡、西の真町I遺跡1~5区でこうした状況はない。軽石層下から水田跡が3面検出された。水田の表面はほぼ平坦であり水田面を削り込む耕作痕がある。1番水田の上面の耕作痕は様々な方向を向き「弧」の形と「コ」の形がある。「コ」の形の刃先幅は11~15cmである。エッジによってつけられた耕作痕の深さは、「弧」のタイプも「コ」の形ともに4~5cmである。2番水田跡は、上幅70cm下幅90~110cm、高さ10~17cmの畔に区画され、面積は36㎡以上の広さである。水田面全体に平行な耕作痕がついている。耕作痕は明瞭であり農具の跡がたどれる。農具の刃先幅は16cmのものもあるが、15cm幅のものが大半で刃跡は平らである。耕作痕跡は列をなしているが、1列の中に2回の農具痕が重なるものと、1回のもとのとがある。農具の刃先跡と次の刃先跡の間隔は、24cmから63cmとかなり長い。畦の方向に対して農具痕は平行である。また、農具痕の水田面に対する角度は、1番水田より急である。2番水田の中はどうか北は耕作痕が比較的少なくA軽石の残りも多い。耕作が頻繁に行われたためと考えられる。3番水田は、他より角度の急な耕作痕が残っている。1番水田跡の「弧」形や「コ」の形の痕跡とも連っている。角度が急なため、鑑定の可能性が高い。軽石主体の土層からは、18~19世紀の陶磁器が出土しており、水田跡の耕作痕は浅間A軽石降下より新しいものである。なお、1番水田の耕作痕は水田の田起こし、あるいは畝作が、2・3番水田は畝作に関すると考えられる。

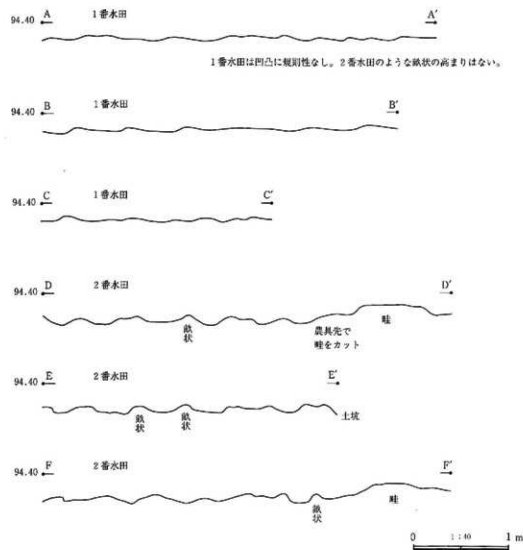


図14 6区浅間A軽石再堆積下遺構エレベーション図

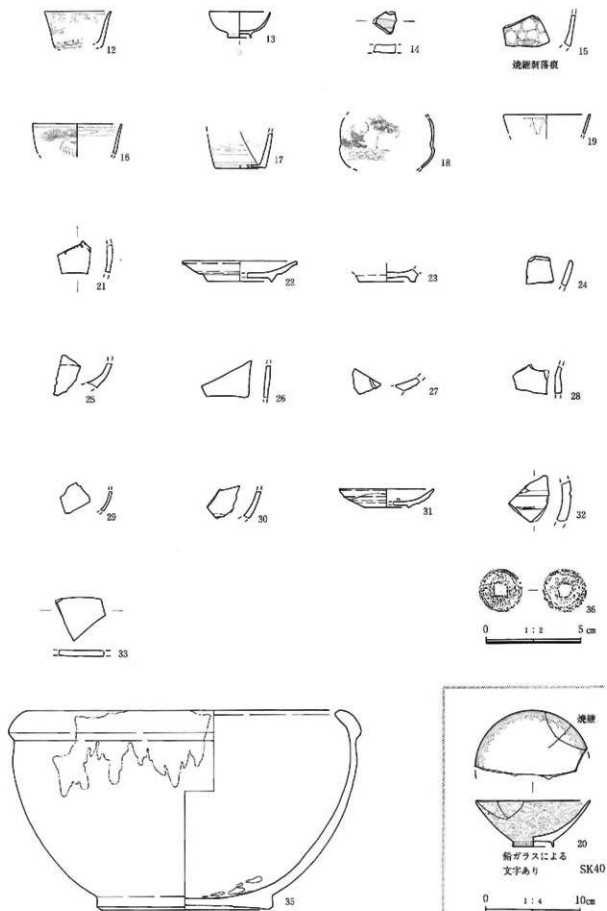


図14 6区浅間A軽石下再堆積下遺構およびSK40出土遺物図

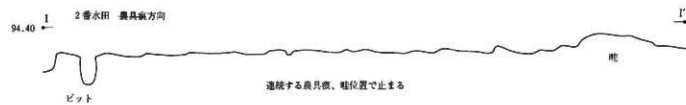
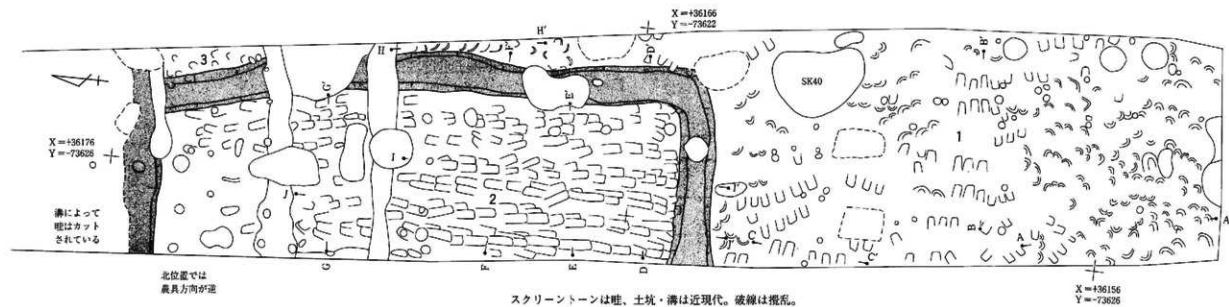


図15 6区浅間A軽石母地積下遺構図

第4節 近世

SD1「遺構」

井伊直政は、1598年に箕輪（現在の箕輪町）から高崎に城を移し、城下町の周囲を「遺構」と呼ばれる堀で囲んだとされる。安政4年の絵図を見ると、「遺構」推定位置に城下町と外部とを区切る水路があることが確認できる。真町は城下町の東端であるが、真町の東の道路に「遺構」が存在したと考えられている。道路西の側溝には、真町から見ると北の位置となる長野堰から分水した農業用水が流れている。

今回の調査のうち1区から4区までは、「遺構」の遺構が埋没していると推定される位置であった。調査では、これらの調査区で南北走行の堀を検出した。なお、真町I遺跡での「遺構」は南北に走る堀であるが、東半分が現在の道路下であり調査で検出したのは堀の西半分である。

堀底は西部分は調査できたが、堀が深くまた崩れやすい土で東部分の調査は危険であった。また、この堀の東部分は道路の側溝下になり、堀の東部については調査できなかった。SD1の規模をつかむため、まず堀の下幅を測り堀の中央部を決め、この堀中央部をもとに全体の堀幅や形状を推定するという方針を立てた。復元した数値のうち、深さについては正確な値であるが、下幅は東の立ち上がりを発掘しておらず間接的な測り方でありやや誤差があると考えられる。また、上幅は堀の東西が対象であるという前提での数値であり、おおよその値である。2区の部分は、調査不可能な東壁をピンボールを用いて下幅を推定した。これをもとに堀の中央部を決定、ついで西側の堀のエレベーションを反転し図上復元した。堀の下幅は1.6m、上幅5.2m、深さ1.3mである。3区も正確な下幅は測っていない。しかし、堀の立ち上がりに近いところで馬の頭骨が出土しており、この頭骨の位置から見ると下幅は少なくとも2.1mはあると考えられる。この位置での堀の規模は下幅2.1m、上幅約5.2m、深さ1.5m程度と推定される。よって、SD1「遺構」の東の立ち上がりは、現在は道路の側溝であり、長野堰の分水が流れている付近と考えられる。

堀の断面形状は上部がややなだらかで、途中から角度が急になり底になる。なお、堀の側面はかなり平滑に仕上げている。堀底はほぼ平らであるが、1区と3区では堀に直交するように、底を掘り残して畦状にしている。また、4区ではミニ水田の田のように掘り残している。堀の標高を調べてみると、1区の北端で92.34m、一番南の4区の南端部に於いては92.36mであり、あまり標高差はない。ちなみに現在のこの地区では北が高く、南に向かって現況水路も流れている。

1区の堀底は東西方向の4本の畦状の形態である。北から幅25cm高さ6cm、幅25cm高さ4cm、幅20cm高さ4cmと続く。最南の部分では、北の畦がしだいに低くなり、ここで極端に高くなる。比高差は25cm、標高は92.58mである。なお、堀の底近くの地山は井野川泥流堆積物層であるが、スコップでは容易に掘れないくらい灰白色をした砂礫層である。この層を掘り込むように堀はつくられ、また畦状の施設もこの層を掘り残しているため、簡単に崩れないと考えられる。

2区の堀底は標高92.70mと1区より高い。それに対して、3区は92.43mと低くなる。なお、3区はしだいに低くなり南側には堀に直交する2本の畦状施設がある。北側の畦は幅30cm高さ25cm断面台形、南は幅20cm高さ6cm断面台形である。2区が一番南の標高を測ると92.64mであり、北側の畦の立ち上がりの標高92.33mと比べると堀底は31cm高くなる。4区の堀底は田の畦が交差するような形状である。東西の畦は幅35cm高さ18cm断面三角形、南北の畦は幅25cm、高さ10cm断面台形である。東西の畦の北は標高92.40m、南はやや低く92.36mとなっている。

堀の覆土は底直上には10cm程度、褐灰色の砂礫が堆積している。この層は堀の側面に近い部分が特に厚く堀構築の時に崩れた土と考えられる。その上部70cm程は褐灰色のシルトで下の方は井野川泥流堆積物層中の砂礫がかなりある。全体では粘性が強く腐植した様子であり、水がよどんだ状態での堆積と考えられる。堀底近くは自然堆積のままで堀ごらいの痕跡は見いだせない。さらに上部70cmは灰黄褐色のシルトである。水成堆積で、水はかなり速い勢いで流れていると考えられる。この層には、堀の東側にあった土塁の土も流れ込んでいる。この灰黄褐色土の上に部分的にAs-Aが二次的に水成堆積した層が見いだせる。これより下部の灰黄褐色

第三章 検出した遺構と遺物

土にはAs-Aは全く含まれないため、このAs-A層より上は、天明以降の堆積物と考えられる。なお、As-A層の堆積位置は堀底より1.35mであり、堀の肩とはほぼ同じ標高である。天明年間には堀は殆ど埋まっていたと見られる。As-Aの上層は褐灰色シルト質の土塁の崩土を混える水成堆積の土である。この層には近世の陶磁器がかなり含まれている。この層の上部から掘り込まれた遺構が検出される。1区は近代の池状遺構、2区は幕末から近代までの溝と土坑、3区は19世紀の溝及び土坑、4区は近代の建物跡、土坑、溝、排水管などである。なお、「遺構」が埋まった場所では近世と見られる建物遺構は検出されない。

安政4年の絵図には、「遺構」を表現したと見られる水路が描かれている。調査では、3区で南北方向の北からの水路SD25を検出した。この水路の西には、19世紀前半と見られる陶磁器が出土するSD3、SD4があり、SD25に連続している。このSD25は安政年間に描かれている水路の可能性が高い。

SD1は堀の掘削から時点はゆるやかに流れる堀であり、それ以後は水の流れが強い。堀は上流である北から流れてくる土砂と土塁の崩土で埋まっている。堀の形が分からないほど埋まった頃は、現在の道路に近い位置に細い水路の形であったと考えられる。

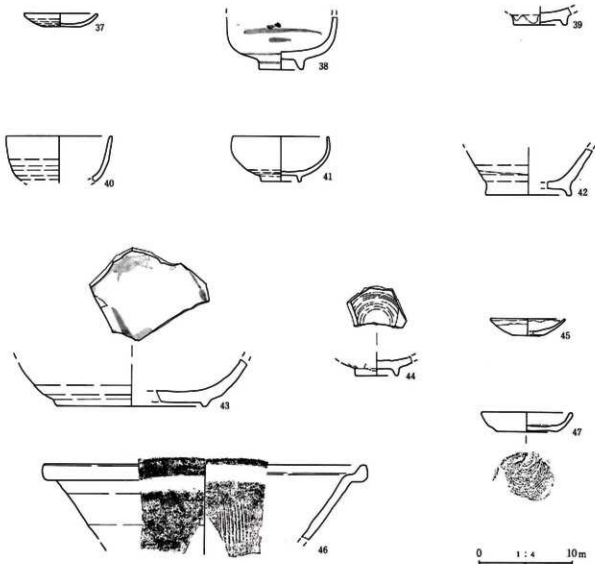


図16 3区SD1中下層出土遺物図

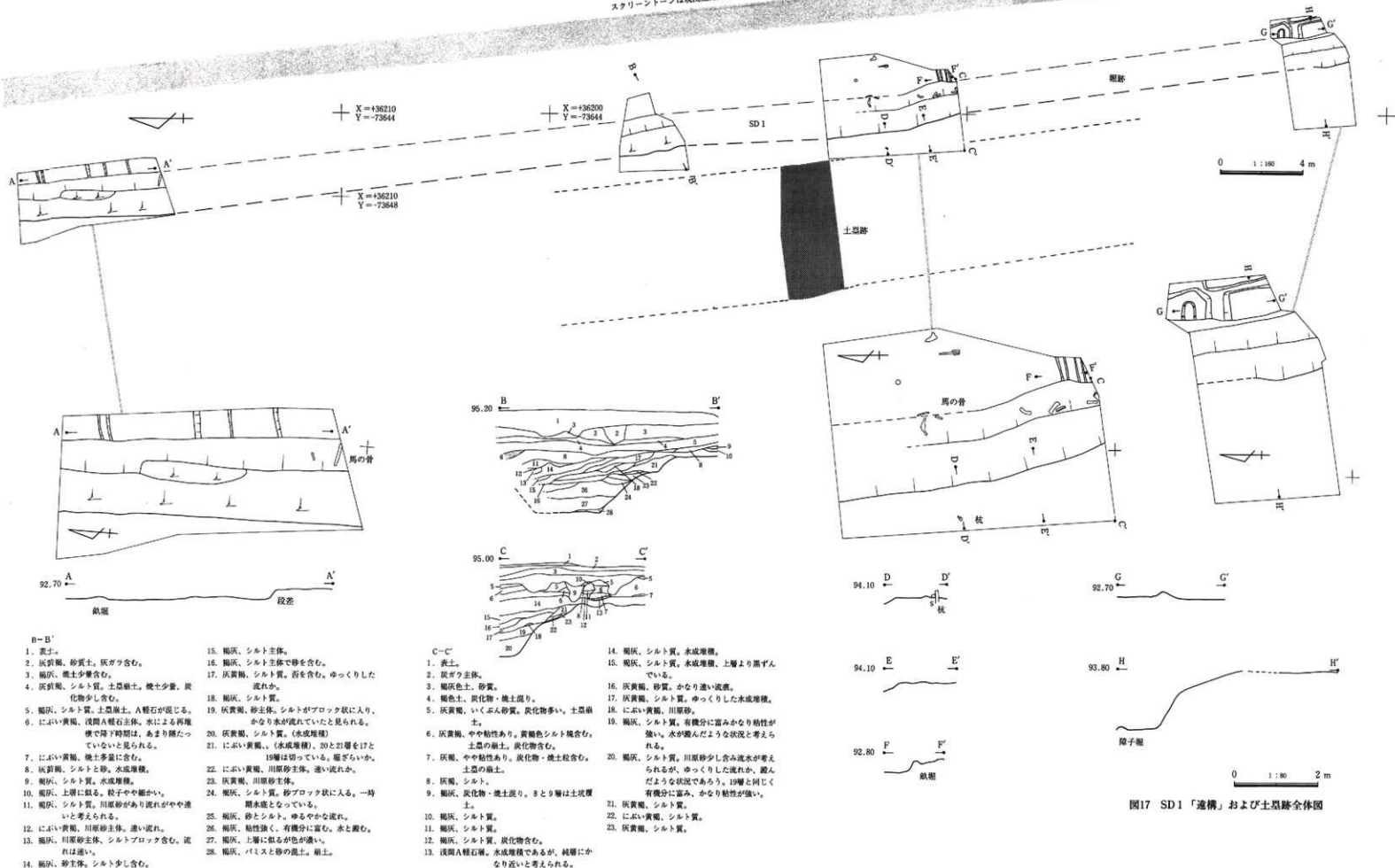


図17 SD1「遠構」および土塁跡全体図



图18 3区SD1中下層出土遺物図

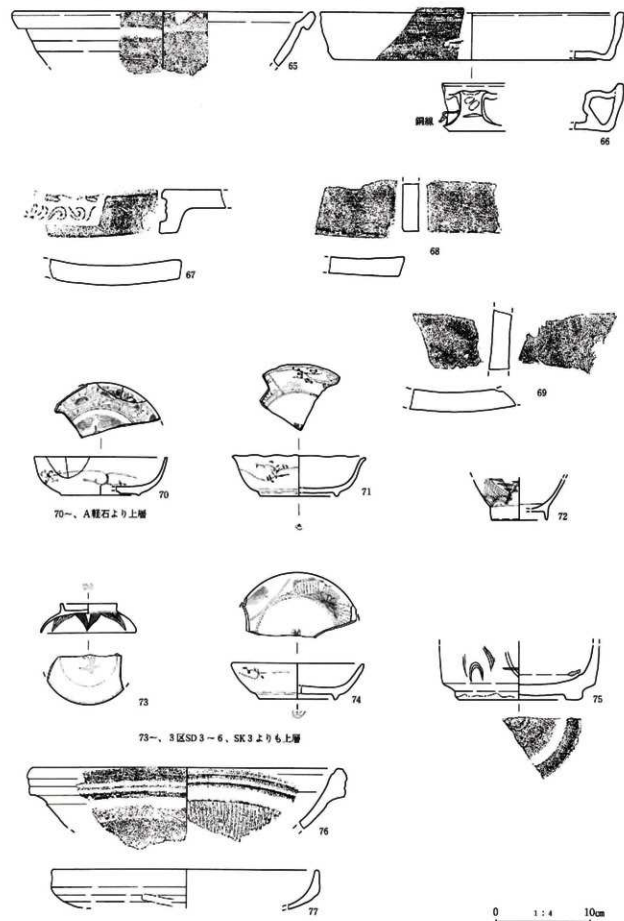


図19 3区SD1 浅間A軽石下層および上層出土遺物図

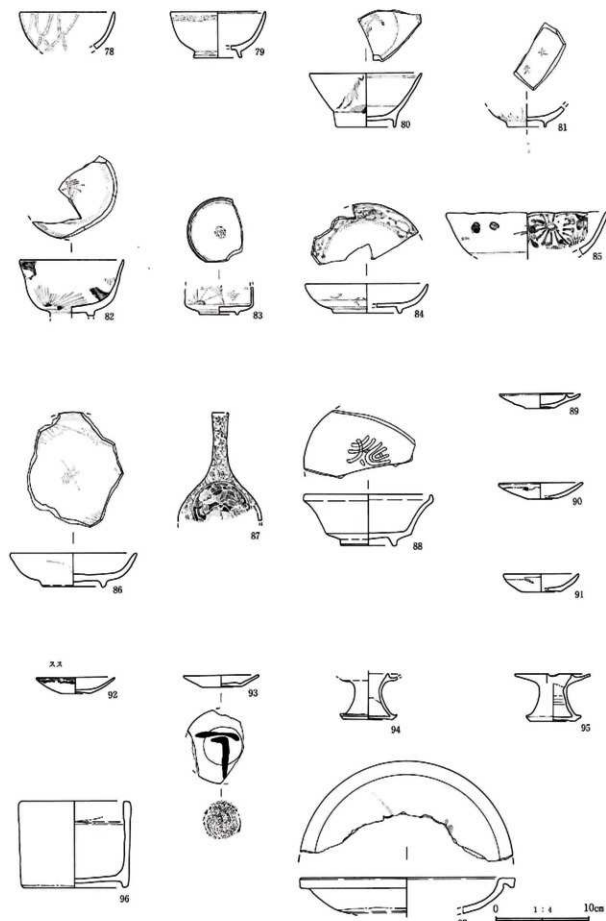


図20 3区SD1 上層出土遺物図

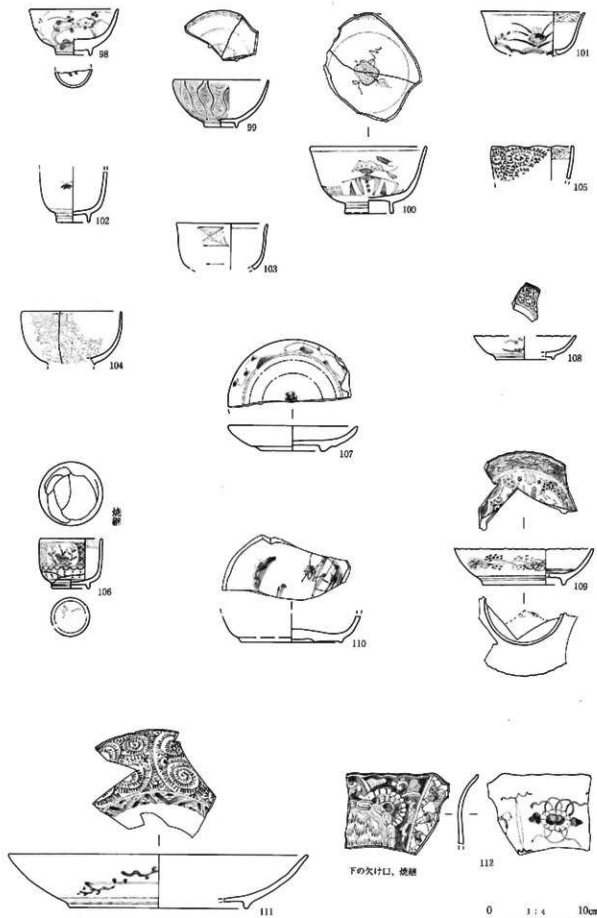


図21 3区SD1上層出土遺物図

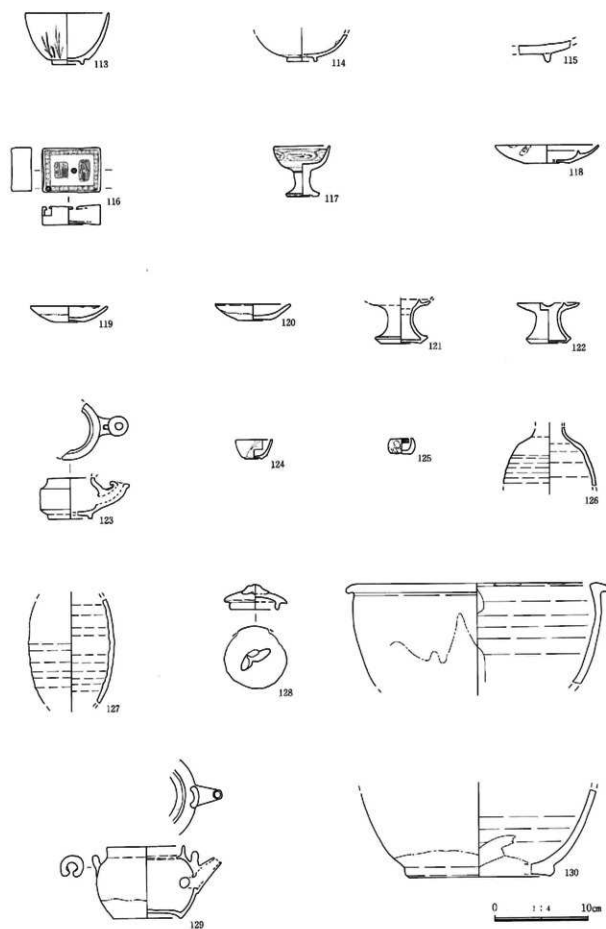


図22 3区SD1上層出土遺物図

土塁跡

SB1の掘り込み面は、5区の南壁で観察できる。井戸は浅間B軽石の直上から掘り込まれており、近世初めの生活面は浅間B軽石層のすぐ上である。5区の東端でこの地表を削りだし、土塁の築いた状況が確認できた。土塁の構築において、基盤がしっかりと面であることが重要である。真町I遺跡での、土塁構築時の地表面はどちらかといえば軟弱である。上から浅間B軽石層、並びにその下部の柔らかな水田土壌である。土塁構築前にこれらを除去し、下のたたくしまった黄褐色土面まで掘り込んでいる。深さは30cm程度であり、底には平らな面をついている。この面はほとんど平らであるが、西端は標高93.82m、東では標高93.98mと、堀に近い方向に向かうにつれ高くなる。土層図18層は井野川泥流中の粘土ブロックを含み、20層は褐色土のブロックを含む。両方の土ともあまり締まっているが混入ブロックが多く盛土と考えられる。これより上はシルト質で横に流れており、土塁が崩れたものと考えられる。

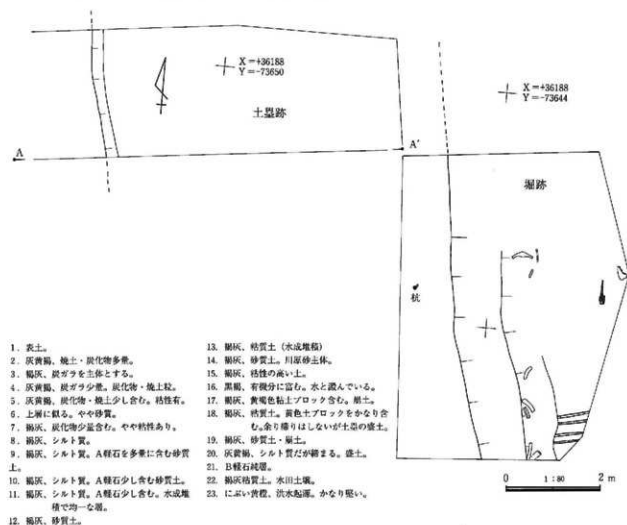


図23 5区土塁跡画

建物遺構

SB1 5区西で検出した。東西2間、南北は1間であるが、それより北側については調査区域外であり、全体の形状は不明である。P2からP4(2本あるうちの東側柱穴痕)までは、梁行と考えられる。建物方向は北2度東、幅は2.25mで、P2から中央のP3までは1.5m、P3からP4までは0.75mと、中央の柱穴はやや東に寄っている。P1とP2の間は1.6m、P4とP5は1.9mである。P1は直径0.6m深さ0.1m、軽石が敷かれている。P2は0.44×0.42m深さ0.32mで底にかけてすばむ。P3は0.60×0.59m深さ0.35mで、柱穴の部分だけ深く0.45mである。ここに幅10cmの柱痕が見える。柱穴を埋める土はかなり締まっている。P4は0.75×0.60mの掘方に2本の柱跡がある。西側は深さ0.4m、東は0.3mである。P5は東西0.7mの楕円形で深さ0.18mである。柱穴内部には後世の掘込みがあり、浅間A軽石が少し入っている。

柱穴裏には、P5の上部を除いて浅間A軽石は含まれない。また、SB1を検出した面は、浅間A軽石層より下部であり、SB1は天明の浅間山噴火(1783)年より古い段階と考えられる。なお、P1内部の軽石は礎石基礎部の乗石と推定される。これ以外の柱穴は掘立柱の構造である。

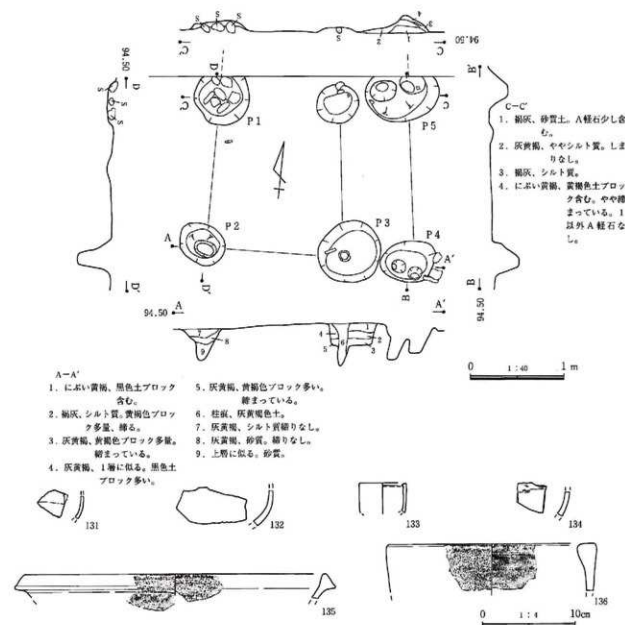


図24 5区SB1画

SB 5

検出面はSB1と同じVI層（B軽石再堆積層）上面である。4本の柱穴が並び3間分である。しかし、この建物跡はトレンチの端部の検出であり、さらに柱穴が連続する可能性もある。また、柱穴が建物跡とすると、建物跡は調査区外が主体である。柱間は東から2.1m、1.75m、1.95mである。柱穴の掘方は東端のもので直径0.65m、深さ0.55mである。この東端の柱穴には柱根が見られる。幅は0.15mである。なお、東端の柱穴埋土から小形金銅製品が出土した。煙管の煙首端部と見られる。

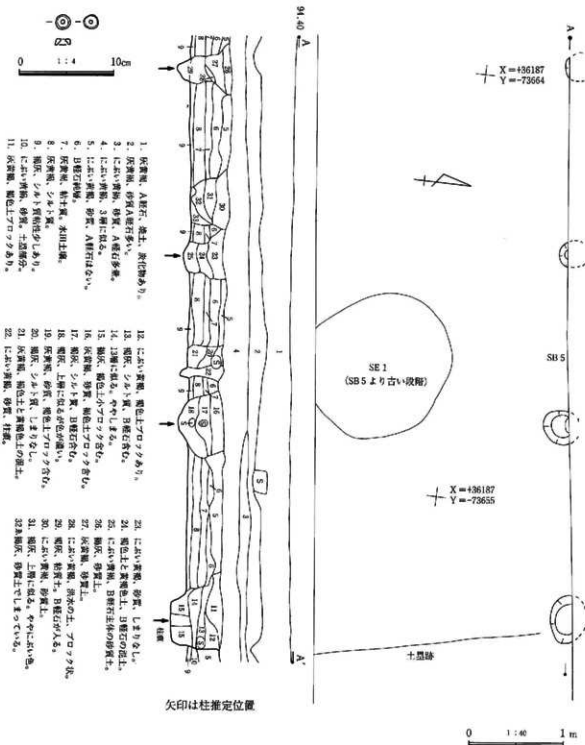


図25 5区SB5図

SB 2

SB1を調査後、その下部で遺構の検出を行った。SB1の検出面は近世下面、浅間B軽石の再堆積層（VI層）下である。この層の下部で、5区の東側で17世紀前半から18世紀前半の陶器が出土するSE1を検出している。よってこのVI層下部は17世紀から18世紀初めの段階と考えられる。5区西部において、VI層下部はVI層である浅間B軽石純層はなく直接洪水起源の層となる。このVI層上面でピットを3基検出した。3基のピットは東西方向に並ぶが一直線上ではなく、中央がやや南にずれる位置関係である。ピットは3基だけであり、他には検出されていない。よって、これらは掘立柱建物跡の一部と見られる。調査区の幅は2.5m余りであり、建物跡が北に伸びると考えると柱間がかなり長くなるため、確定は出来ないが建物跡は南に伸びる可能性が高い。3基のピットは掘立柱建物跡の北隅と捉えSB2と呼称する。SB2は奥行2.65m、方向は北11度西である。中央の柱穴は建物跡内部に寄っており横持ち柱と考えられる。なお、SB1と同様に中央の柱は中心からやや東に寄っている。

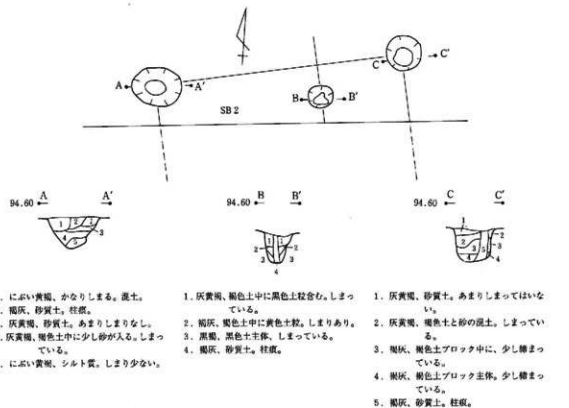
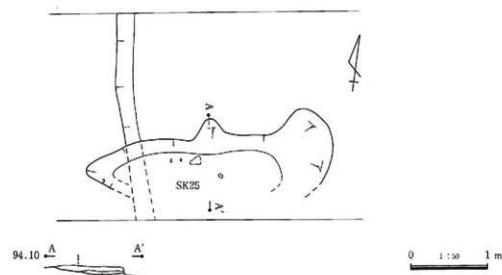


図26 5区SB2図

次頁は5区の近世全体図である。左図は、浅間B軽石再堆積層（VI層）上面で検出したA軽石降下以前の遺構と、遺構の覆土に浅間A軽石を含み天明3年より新しい段階、及び出土遺物から19世紀と考えられるものがある。横列SA1は、SB1やSB5と同一面であり、天明の浅間山噴火より古い段階面での検出である。なお、遺構のうちSK5は近代で、SD7・SK14・SD8・SD17・SK13は天明の浅間山噴火以降幕末までと考えられる。その他の遺構SK15・SK7・SK8・SK9・SK11・SK12・SB1・SB5は天明の浅間山噴火以前の遺構である。右図は、VI層（浅間B軽石再堆積層）の下面で検出したものであり、近世でもやや古い段階の遺構である。掘立柱建物跡SB2、井戸跡SE1などが代表的な遺構である。横列SA5は左図のSA1とはほぼ同じ位置である。SA5とSB2、SA2とSE1とは重なった位置関係であり別時期と考えられる。なお、SD19やSB2の面はその東から比べるとやや高くなっている。

SK25

5区の東側であり、近世下面で検出した。東西3.3mであるが、南北は先に土塁断ち割りトレンチを入れたため性格数値は不明であるが1.3m程度と推定される。深さは、確認面から約0.1mと浅い。全体にゆがんだ楕円形を呈した土坑である。この土坑がある位置には、かつて土塁が存在し、土地をカットして整地した様子を確認している。土坑・SK25の北側には土塁の盛土が一部残っているが、この盛土をSK25は切っている。SK25は、土塁が築かれた後で、それも土塁がかなり崩れた段階に掘り込まれたと推定される。土坑の覆土を観察すると自然埋没であり、浅間A軽石は覆土に含まれない。土坑からの出土遺物は、17世紀末から18世紀初頭ないし前半に属するものであり、土坑は、18世紀前半頃に位置づけられる。そして、土塁の位置にSK25が掘り込まれたということで、土塁は崩れていたか土地が平らになっていたことが間接的に知られる。18世紀前半には、土塁に防御施設としての意識が喪失していた可能性もある。



1. 灰青刷、シルト質。A軽石は含まない。
2. 黒刷、シルト質。軽石あり。A軽石は含まない。

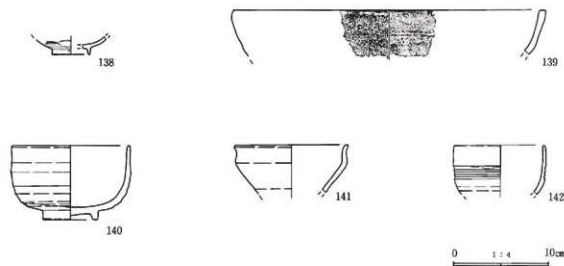


図29 5区K25遺構遺物図

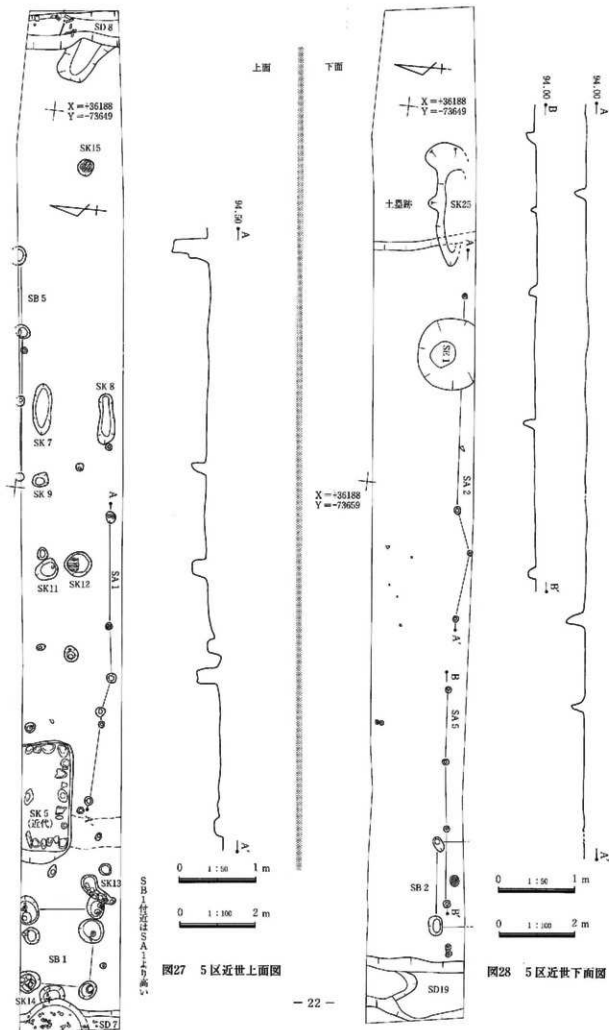


図27 5区近世上面図

図28 5区近世下面図

SE1 (SK27)

5区東で検出した。掘り込み面での規模は、東西1.9m、南北1.5+ α m、深さ2.07mの規模で、平面は円形、断面は底に向かってすぼまる形の井戸跡である。検出面は、浅間B軽石再堆積層下面であり、その上を覆う地層の6層は、標準土層VI層に対応される。VI層の上には、SB1とSB5が、VI層の下部では、SB2が検出されている。SE1は、SB2と同時期の可能性が高い。出土遺物の年代は、17世紀末から18世紀前半である。井戸は埋め戻されており、上部は基盤層の黄褐色土で突き固められている。井戸跡は、井野川泥流堆積物層を掘り抜いており下部の地盤は堅い。なお、井戸跡からの木製品の出土はなく、井戸枠が存在したか否かは不明である。

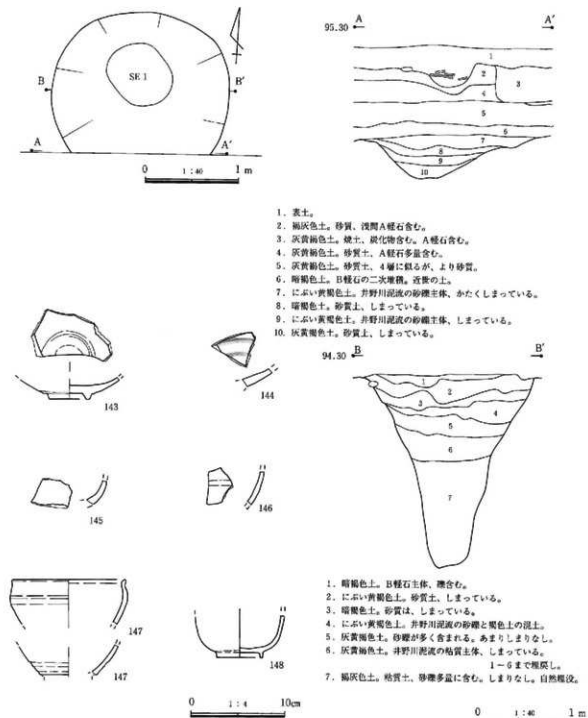


図30 5区SE1遺構遺物図

SK8

5区近世上面、VI層（浅間B軽石再堆積層）の上面で検出した。東西1.35m、南北0.5m、深さ0.1mである。砂質の土で自然埋没している。覆土には、浅間A軽石は含まれていない。出土遺物には、丸皿がある。この丸皿は、17世紀～18世紀前半に位置づけられている遺物である。北隣のSK7は、長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.08mの長楕円形の遺構である。埋没の様子も似ており、同一の性格の遺構の可能性がある。

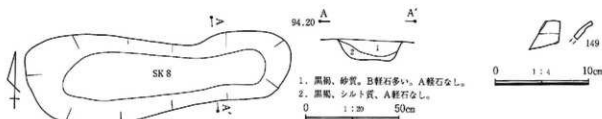


図31 5区SK8遺構遺物図

SK13

5区西側近世上面、VI層（浅間B軽石再堆積層）の上面で検出した。掘立柱建物跡・SB1の南東隅の柱穴と重複している。土の観察から、SK13の方がSB1よりも新しい。また、SK13の覆土には、二次堆積の浅間A軽石が含まれており、天明よりも新しい遺構である。規模は、0.80×0.45m、深さ0.12mである。内部からは、自然石とともに瓦・漆片が出土している。

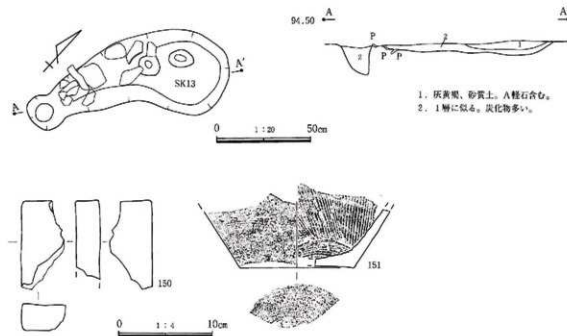


図32 5区SK13遺構遺物図

SK15

5区東、近世上面で土器が存在していた部分での検出である。円形で直径0.44m、壁は直に近く、土坑に接して自然炭化した桶と見られる木が残存していた。土坑の底に接して、2枚の板が残っていた。2枚合わせた直径は0.41mである。それぞれ、半円形をしており、幅は0.16mと0.24m、厚さは2枚とも1.5cmである。材はかなりのみみがけしい。御古環境研究所の樹種同定によれば針葉樹とのことである。本遺跡で発見された大形の桶・盤の底板はスギのみであり、材はスギの可能性が高い。SK12も底面に板が残存しており同様な遺構と考えられる。

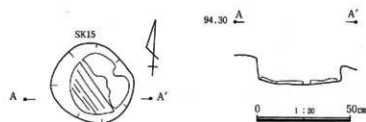
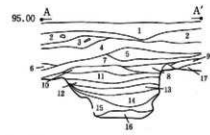
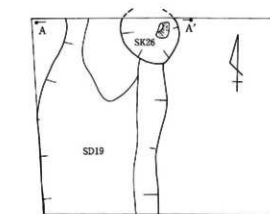


図33 5区SK15遺構図

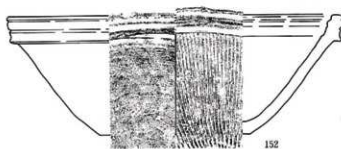
SK26

5区西近世上面で検出した。溝SD19が埋没した後に、これを切る形で位置関係である。規模は、 $1.1 \times 0.6 + \alpha$ m、深さ0.10 mである。土坑は、両側から土が入り込み自然埋没した状況であり、内部にはA軽石の二次堆積粒子が少量に含まれている。浅間A軽石の降下よりも確実に新しい遺構である。出土遺物には、堺・明石の播針と煙管の吸口がある。



1. 表土。
2. におい黄褐色、砂質土。焼土が多い。
3. 焼灰、砂質土。炭化物多い。
4. 灰黄褐色、砂質でA軽石多い。焼土を含む。
5. 灰黄褐色、砂質でA軽石多量を含む。
6. 灰黄褐色、砂質土。A軽石多い。
7. 焼灰、砂質土。A軽石多量を含む。
8. 灰黄褐色、ややシルト質。A軽石あり、SK26の埋土。
9. 焼灰、A軽石含む。砂質、SK26の埋土。
10. 灰黄褐色、シルト質。A軽石若干含む。
11. 灰黄褐色、川原砂多量を含む。
12. におい黄褐色、砂質土。川原砂多い。
13. 灰黄褐色、砂質土。
14. 焼灰、砂とシルトの埋土。
15. 焼灰、シルトブロックと砂の埋土。11-14等はSD19埋土。
16. 焼灰、シルトのブロック主体。砂を少し含む。
17. 灰黄褐色、シルト質。(活世)

0 1:50 1 m

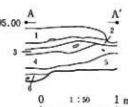
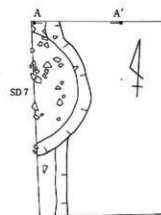


0 1:4 10 cm

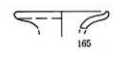
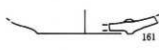
図34 5区SK26遺構遺物図

SD7

5区近世上面西隅で検出した。浅間A軽石が覆土に入る土坑SK14と重複し、SD7の方が新しい。南北走向の溝であるが、西半部は調査区外となり全体形状は不明な部分が多い。溝の中央では東に膨らみ、またこの部分は南と北と比べて深い。溝の底は全体にゆるやかなUの字形を呈している。溝は自然埋没の状況であり、覆土には炭化物や二次堆積の浅間A軽石が多量に入っている。なお、覆土の堆積の状況には、水の流れた様子は確認されない。溝からの出土遺物は、19世紀段階の陶磁器が中心である。154は、19世紀段階の染付碗、155から158までは、染付小碗ないし小杯である。156には口縁部に曜反りが認められる。159は陶胎染付で瀬戸美濃産と考えられる。162と163の陶器はいわゆる馬の目皿である。165の青磁花生は18世紀のものであろう。



1. 表土。
2. におい黄褐色、シルト質。焼土多い。
3. 焼灰、砂質。浅間A軽石二次的に含まれる。
4. 3層に似るが、やや締まっている。
5. 灰黄褐色、A軽石含む。細かい川原砂多い。
6. におい黄褐色、砂質土。炭化物含む。



0 1:4 10 cm

図35 5区SD7遺構遺物図

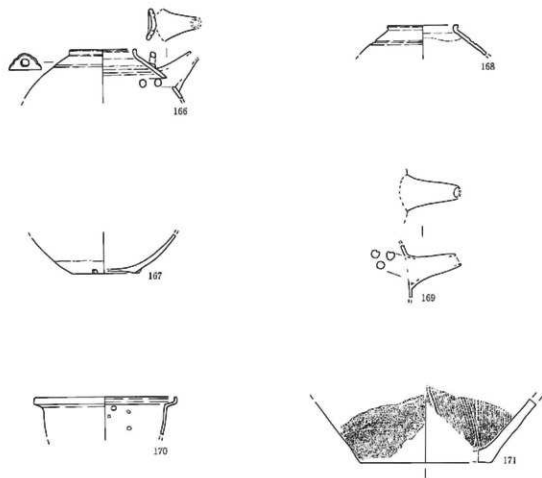
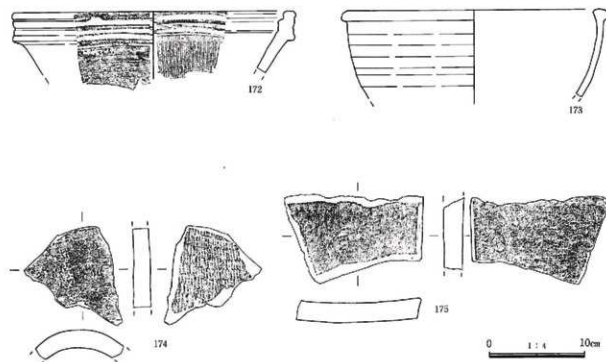
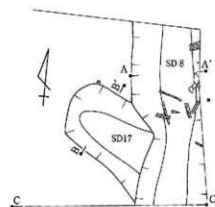
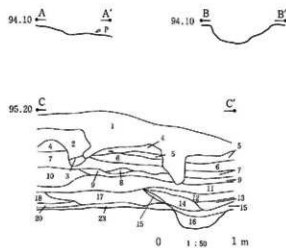


図36 5区SD7出土遺物



SD 8・17

5区近世上面の東端で検出した。SD17とSD8は元は土塁があったところである。SD8は水が流れた痕跡があり、また底の部分では敷んだような堆積状況である。出土遺物は19世紀を中心としたものであり、土塁がかなり低くなったか、削平された後の遺構と考えられる。



1. 表土。砂質土。
2. 灰褐色土。炭ガラ主体とする。
3. 炭渣。
4. 灰黄褐色土。炭ガラ少量。流土。炭化物含む。
5. 灰黄褐色土。炭化物。流土少し含む。粘性あり。
6. 5層に似る。やや砂質。
7. 褐色土。炭化物少量含む。やや粘性あり。
8. 褐色土。シルト質。
9. 褐色土。シルト質。A軽石含む。
10. 褐色土。シルト質。A軽石少し含む。
11. 褐色土。砂質土。
12. 褐色土。粘質土。
13. 褐色土。粘質土。水成堆積。
14. 褐色土。砂質土。川原砂主体。
15. 褐色土。粘性の高い土。
16. 黄褐色土。有機質に富む。水はあまり流れていない。
17. 褐色土。黄褐色粘土ブロック含む。シルト質。A軽石なし。
18. 褐色土。黄褐色粘土ブロック多い。土層上。
19. 灰黄褐色土。シルト質やまっている。
20. 灰黄褐色土。流土。流土層上。
21. 灰黄褐色土。流土。流土層上。

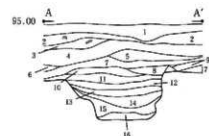
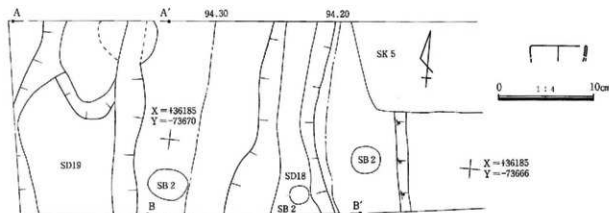
図37 5区SD8・17遺構遺物

SD18

5区西面から検出した。SB 2と切り合い関係にあり、SB 2よりも古い遺構である。幅0.7~1.5m、深さ0.8~1.0mである。底面部分の標高は、北が高い。川原砂を主体とし、褐色土ブロックを混えた土で自然埋没している。覆土の様子から、流水があったと確認される。近世でも古い段階、もしくは中世遺構の可能性もある。

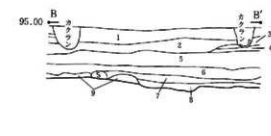
SD19

5区の近世下面の西隅で検出した。SB 2の西側となる。浅間A軽石を多量に含み、19世紀段階の楕円の出土しているSK26と重複関係にあるが、本遺構の方が古い。溝の規模は、幅1.3~1.7m、深さ0.4~0.7mで底は平らに近い。溝底の標高は、北隅で93.70m中央にある段の北が93.73m、段を越えた部分で93.83m、溝の南端は93.86mと南に向かって次第に高くなっていく。溝の覆土には川原砂やシルトが多く水の流れが考えられる。



1. 表土。
2. におい黄褐色、砂質土。堆土砂多。
3. 褐色、砂質土。炭化物多い。
4. 灰黄褐色、砂質でA軽石多。堆土砂含む。
5. 灰黄褐色、砂質でA軽石多量に含む。
6. 灰黄褐色、砂質土。A軽石多。
7. 褐色、砂質土。A軽石多量に含む。
8. 灰黄褐色、ややシルト質。A軽石あり。
9. 褐色、A軽石含む。砂質。
10. 灰黄褐色、砂質土。川原砂多量に含む。
11. 灰黄褐色、砂質土。川原砂多量に含む。
12. におい黄褐色、砂質土。川原砂多。
13. 灰黄褐色、砂質土。
14. 褐色、砂シルトの混入。
15. 褐色、シルトブロックと砂の混入。
16. 褐色、シルトのブロック主体。砂を少し含む。
17. 灰黄褐色、シルト質（近世）。

11~16層がSD19の覆土。全て風成堆積。



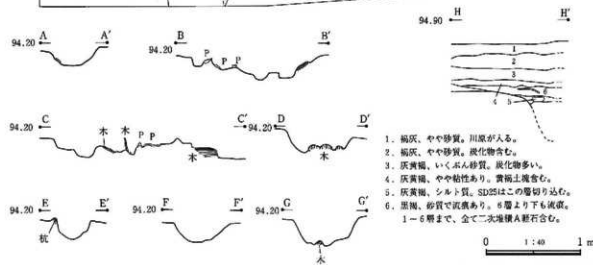
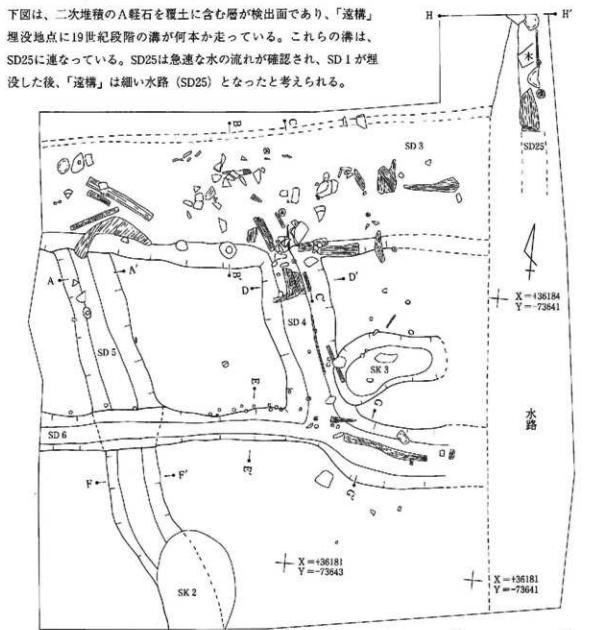
1. 表土。
2. 灰黄褐色、砂質土。A軽石含む。
3. 灰黄褐色、砂質土。A軽石やや少ない。層まっている。
4. 褐色、A軽石多量に含む。
5. 灰黄褐色、砂質土多量に含む。段下部に均質あり。
6. 褐色、シルト質。B軽石少し含む。やや層まっている。
7. 灰黄褐色、シルト質。B軽石と川原砂少し含む。（風成堆積）
8. 灰黄褐色、シルト質。川原砂と褐色土ブロック含む。
9. 灰黄褐色、砂質。B軽石の二次堆積。（境界ではない）

0 1:30 1m

図38 5区SD18・SD19図

3区近世上面について

SD 1「造構」は、天明の浅間軽石降下時には殆ど埋没している。下図は、二次堆積のA軽石を覆土に含む層が検出面であり、「造構」埋没地点に19世紀段階の溝が何本か走っている。これらの溝は、SD25に連なっている。SD25は急速な水の流れが確認され、SD 1が埋没した後、「造構」は細い水路（SD25）となったと考えられる。



1. 褐色、やや砂質。川原が入る。
2. 褐色、やや砂質。炭化物含む。
3. 灰黄褐色、いくぶん砂質。炭化物多い。
4. 灰黄褐色、やや粘性あり。黄砂土層含む。
5. 灰黄褐色、シルト質。SD25はこの層より下へ流す。
6. 褐色、砂質で炭化物あり。6層より下へ流す。
- 1~6層まで、全て二次堆積A軽石含む。

図39 3区上層近世溝跡図

SD 5

3区近世上面で検出した。SD 3と切り合い、SD 3よりも古い遺構である。覆土の流痕が認められ、北から南への水路と考えられる。規模は、幅0.55m～0.6m、深さ0.25m程度である。この遺構はSD 1「遺構」の上部にあたり、「遺構」が埋没した後に掘削されたと考えられる。SD 5の側面には、二次堆積ではあるが浅間A軽石層の凝集が認められる。浅間A軽石の降下時に比較的近い、A軽石降下以降の遺構と考えられる。出土遺物には、陶器の皿と碗がある。

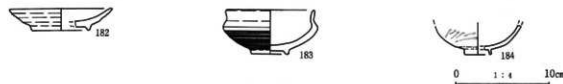


図40 3区SD 5出土遺物図

SD 3

3区近世上面で検出した。SD 5と同じく「遺構」が完全に埋没した後の溝である。東に向かって傾斜があり流痕が認められる。規模は、幅約1.3m、深さ0.25mで、断面はゆるやかなU字形を呈する。東には、水路SD 25が走っており、それにつながる水路と考えられる。溝からは、陶磁器や瓦とともに、木製品や炭化材の出土が多い。出土遺物の陶器や磁器は、189のように18世紀後半と見られるものがあるが、19世紀～幕末のものが多い。187は、寛政（1789～1800）年間から始まったとされる、鉛ガラスによる欠けた磁器を修理する焼継が認められる。207は、平瓦の瓦当の破片である。なお、SD 3はSD 4と連続した遺構であり、SD 3を流れた水は主要水路であるSD 25だけでなく、SD 4にも流れたと考えられる。

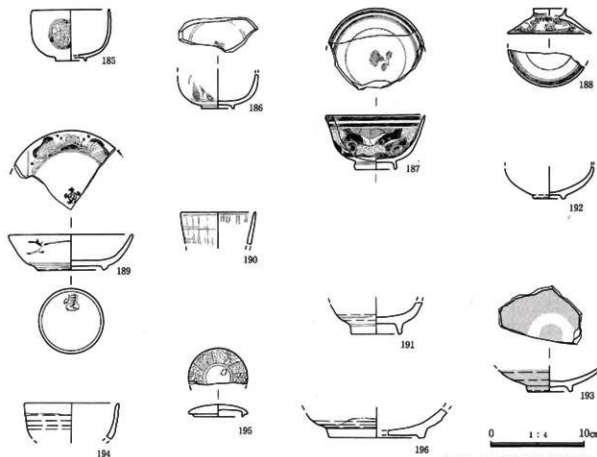


図41 3区SD 3出土遺物図

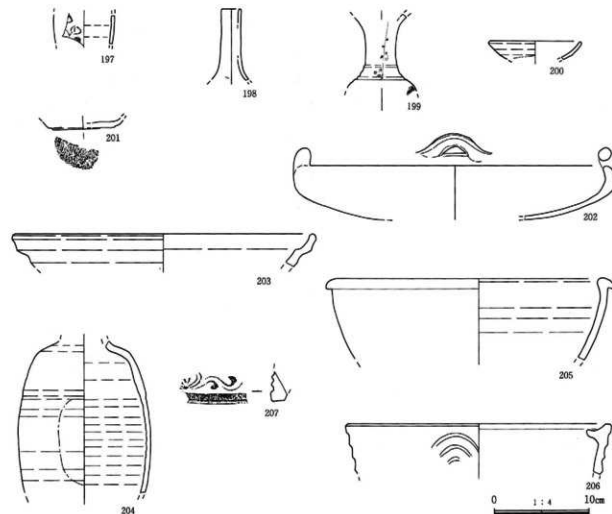


図42 3区SD 3出土遺物図

SD 4</

SD 6

SD 5と切り合い、SD 5より新しい。溝の内側に沿って細い木杭が立てある。東に向かい、SD 4と合流する。

SK 3 3区のSD 4と切り合う位置にあり、SD 4よりも新しい。規模は、 1.2×0.65 m、深さ0.1mでややゆがんだ楕円形を呈する。シルト質の水成堆積物で自然埋没している。出土遺物には、磁器壺、陶器小甕、土師質甕がある。いずれも19世紀前半から幕末に位置づけられる。

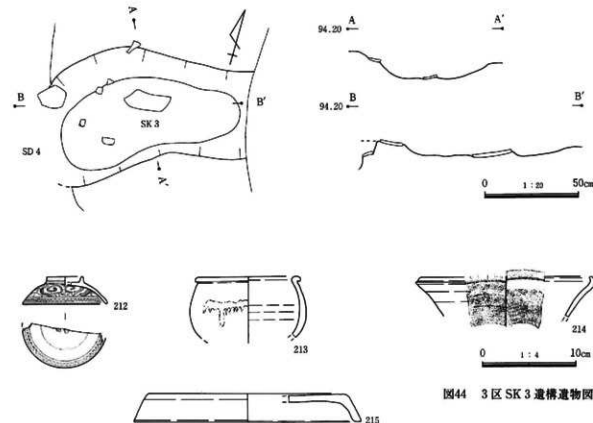


図44 3区SK 3遺構遺物図

SK 4

3区のSD 3 (図39)の北の位置で検出した。しかし、検出面はSD 3～6、SK 3などの遺構が完全に埋没した後の面であり、これらの遺構よりさらに上層である。土坑の規模は、 0.65×0.52 m、深さ0.25mで、土坑のへりに沿って炭化した楕円ないし楕の銅板が残存しており、楕ないし楕を埋めた施設と考えられる。覆土は焼土を含む砂質土で、出土遺物には瓦や陶磁器片がある。

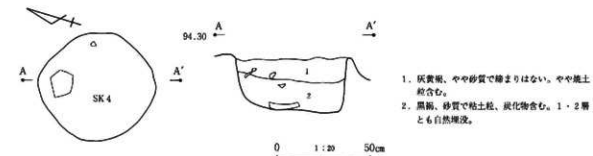


図45 3区SK 4図

第5節 近代

1区SD 2

1区で検出した。「遺構」であるSD 1が、完全に埋没した後の施設である。このSD 2は、南北に弧状を描く施設であり、内部に水を引き入れた様子が観察できる。SD 2の東側は、コンクリートに囲まれ上が歩道となっている水路が存在する。この水路には長野川の分流が南に流れる。古くはSD 1、19世紀には3区SD 2 5に見られる水路の末裔と見られ明治・大正にもあったと考えられる。

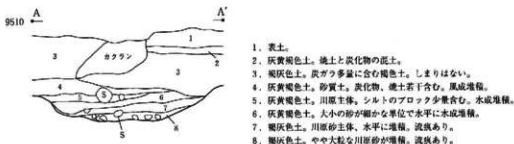
SD 2の北端は、幅約1.3m深さ0.5m程度であり、側面には石垣が溝底には、長さ1m以上の木材が置かれている。溝底の標高も現況水路に近く溝底には小さな川原石が多く水が流れていた様子が見られる。SD 2への水の取り入れ口と考えられる。その南に向かうと大きく西に向かって膨らみ、また溝底も深くなる。最大幅の部分は、西側が調査区外のため測れないが、2.5～3m程度と考えられる。

その後は、東に向かって急に折れる。最南部では、溝底のレベルが急に上がり幅も1.2m程度となる。

SD 2は、もとは「遺構」であるSD 1が存在していた場所にあたり、SD 1の埋土が大部分のため、壁はシルト質でもろい。そのため、北と南では壁に石を積んでいる。また、中央東側では横板を立て杭を組み合わせて土砂の崩れを防いでいる。なお、SD 2が大きく膨らんだ西側では、SD 1の西となり基盤である井野川泥流層のため堅い。よって、何本かの杭が壁に打ってあるのみである。

この施設は、まだ腐植しきっていない黒色のシルト質土壌で、水がよどんだような堆積状態である。北から水をこの施設SD 2に引き込み、また南から排出するものと考えられ、池のように一時的に水を湛水させ利用したものと考えられる。

SD 2の埋没土壌の直上は、炭殻で埋め土してあった。SD 2からの出土遺物は、陶器、磁器、ガラス製品などで、221に見られるように磁器はコバルト軸による銅版転写であり、明治から大正頃に存在した施設と考えられる。



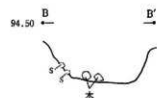
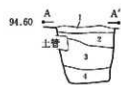
1. 表土。
2. 灰黄褐色土。焼土と炭化物の底土。
3. 褐色土。炭が多数含まれる褐色土。しりはない。
4. 灰黄褐色土。砂質土。炭化物。焼土。土器片を含む。炭成堆積。
5. 灰黄褐色土。川原土。シルトのプロック少量含む。水成堆積。
6. 灰黄褐色土。大小の砂が細かな単位で水平に水成堆積。
7. 褐色土。川原砂主体。水平に堆積。炭成あり。
8. 褐色土。やや大粒の川原砂が堆積。炭成あり。

図46 1区SD 2セクション図

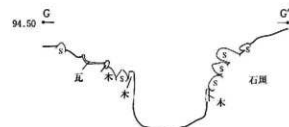
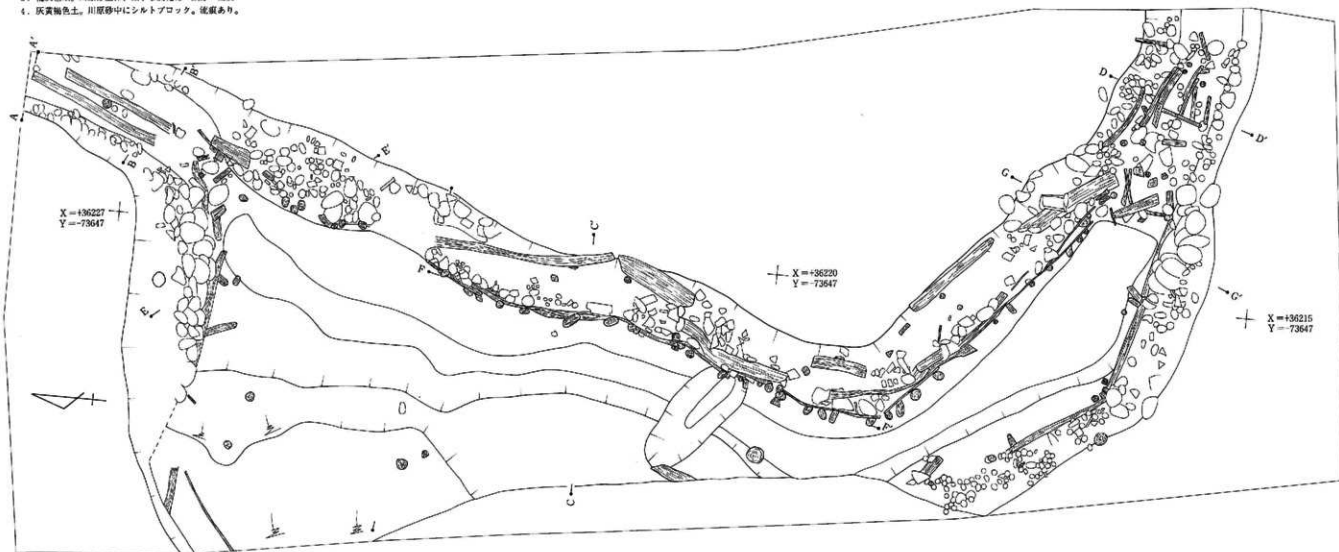
第三章 検出した遺構と遺物



図47 1区SD2出土遺物図



1. 黒褐色土。粘土質。炭ダケが多い。
2. 灰黄褐色土。砂質。炭成層。炭化物少しあり。
3. 暗灰色土。川原砂主。微小炭化物・鉄分・炭屑。
4. 灰黄褐色土。川原砂中にシルトブロック。炭屑あり。



0 1:40 1m

図48 1区SD2全体図

2区

下図は2区の最上層である。この下部にSD1は存在し、SD1が完全に埋没した後の遺構である。溝と土坑が主体であり、建築遺構は認められない。溝や土坑の覆土には、焼土や炭化物が多く含まれるものがあり、火事の後始末と見られる。SD9は、東に向かう排水溝と考えられるものであるが、258-260の徳利が出土している。草末から明治初期に位置づけられる。

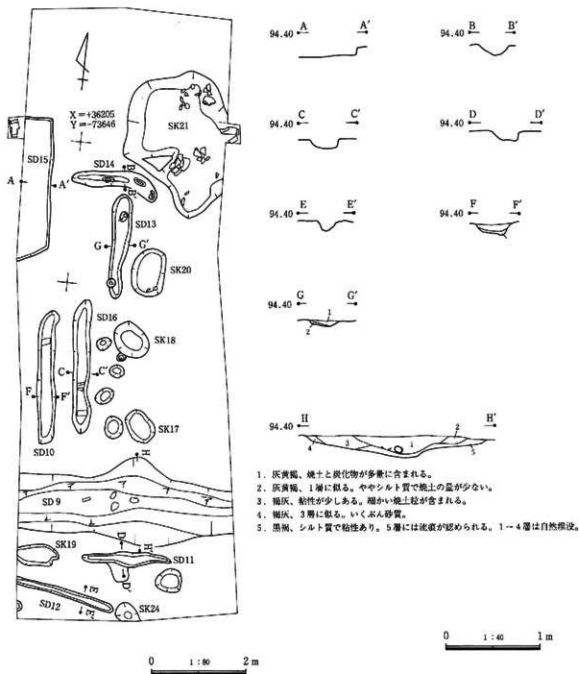


図49 2区上層遺構図

4区

調査区最南の最上層の遺構である。1～3区と同様に、SD 1が埋没した後の遺構である。SB 4とSB 6は、柱穴が列をなす。掘立柱建物跡とも考えられるが、SB 4は北が未調査、SB 6は西が調査区外なので詳細は不明である。南東のSB 3は、内部に栗石がある土坑が2基ある。南は直径0.5m、北は0.6×0.7mの掘方内部に6～15cm程度の川原石を置いたもので礎石建物の基礎の可能性が高い。北寄りの東西走向のSD31部分には土管が並べられている。土管を据える掘方は幅0.6m、土管は長さ0.66m直径0.18mであり、陶製で鉄軸が施軸されている。調査区内では、9本土管が確認できるが西から3番目の土管の側部は穿孔され、斜め方向からの土管と接合し、その部分はセメントで固めている。SD21に敷設された土管よりもSK32は新しい。出土遺物は明治～大正であり、明治に敷設された下水管と考えられる。土管は小形であるが、これによく似た土管が高崎城三ノ丸遺跡で見られている。

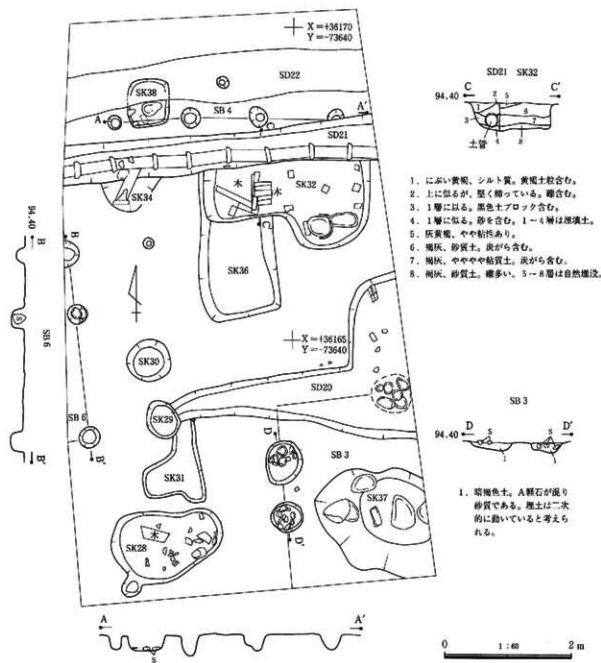


図40 4区上層遺構図

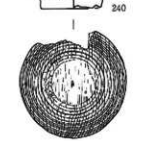
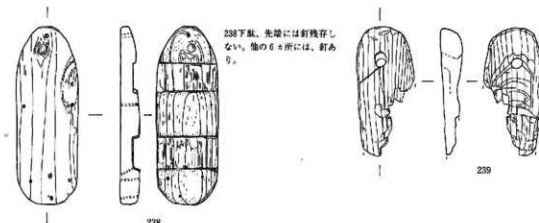


図51 出土木製品図

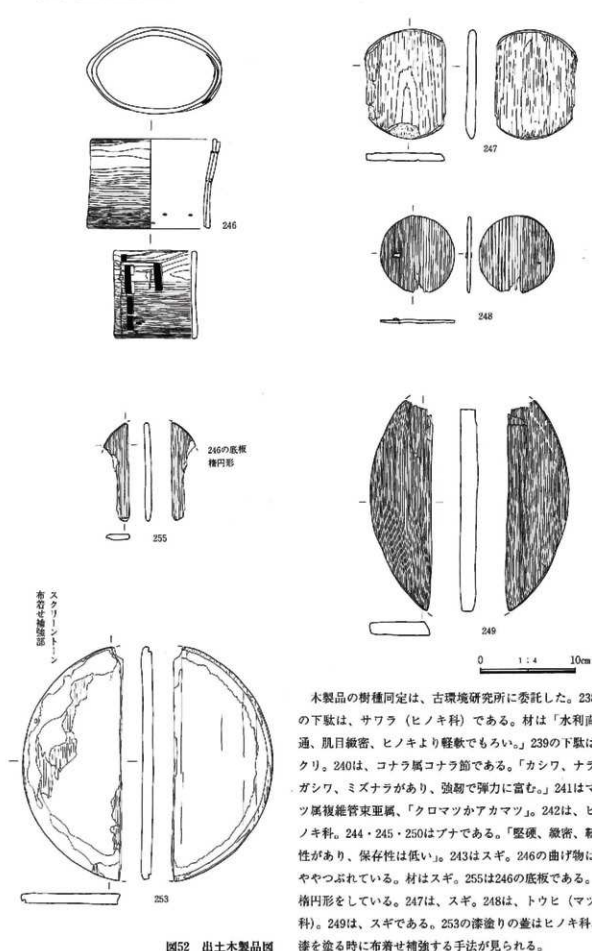
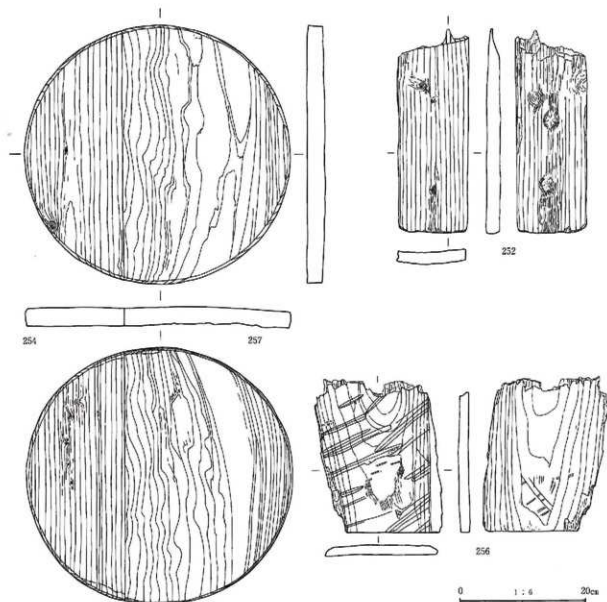


図52 出土木製品図

木製品の樹種同定は、古環境研究所に委託した。238の下駄は、サワラ（ヒノキ科）である。材は「水利直通、肌目緻密、ヒノキより軽軟でもろい。」239の下駄はクリ。240は、コナラ属コナラ節である。「カシワ、ナラカシワ、ミズナラがあり、強靱で弾力に富む。」241はマツ属椎輪管束亜属、「クロマツかアカマツ」。242は、ヒノキ科。244・245・250はブナである。「堅硬、緻密、靱性があり、保存性は低い。」243はスギ。246の曲げ物はややつぶれている。材はスギ。255は246の底板である。楕円形をしている。247は、スギ。248は、トウヒ（マツ科）。249は、スギである。253の漆塗りの蓋はヒノキ科、漆を塗る時に布着せ補強する手法が見られる。



254と257はぴったりと食い合わない櫛の底板。材は両者ともスギ。252は櫛の側板で材はスギ。「軽軟であるが強靱」。256の材は、外面に工具の跡が見られ薄い板であり建築材と考えられる。材はアカマツ。「重硬な良材で水湿に耐える」 註「内部の文は『真町1遺跡出土木製品の樹種同定』より引用。



図53 出土木製品及び2区SD9出土遺物図

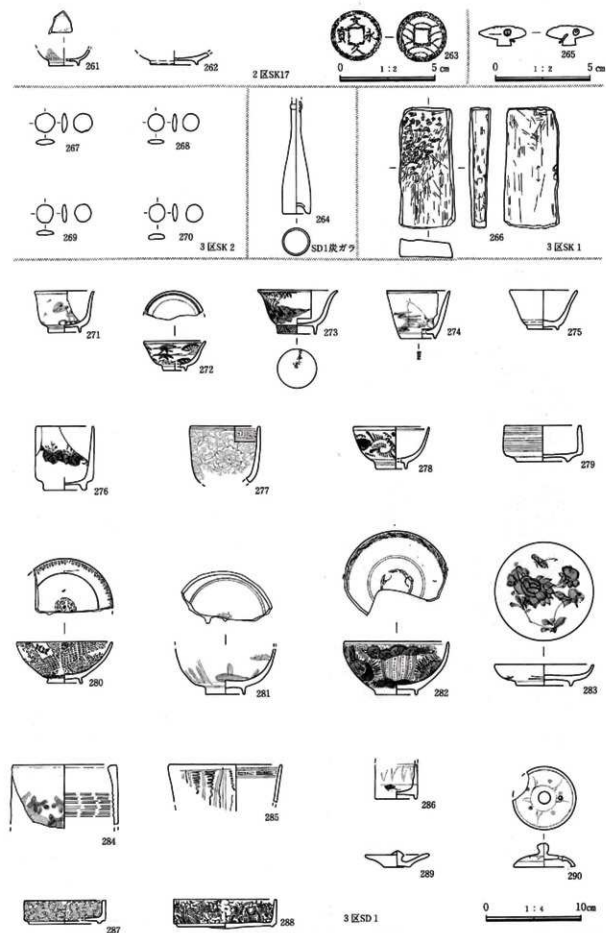


図54 2区SK17、SD1、3区SK1・2、3区SD1最上層出土遺物図

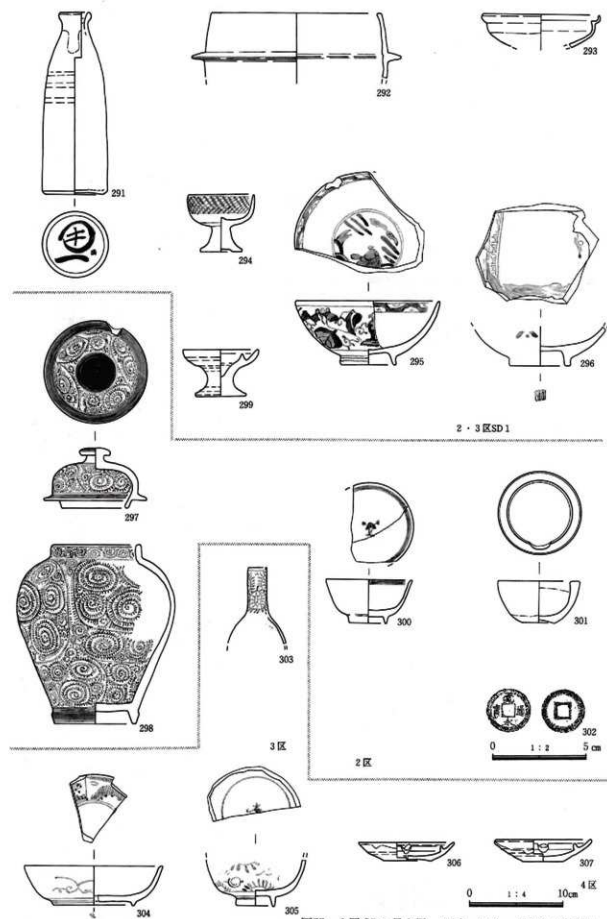


図55 3区SD1最上層、2区、3区、4区出土遺物図

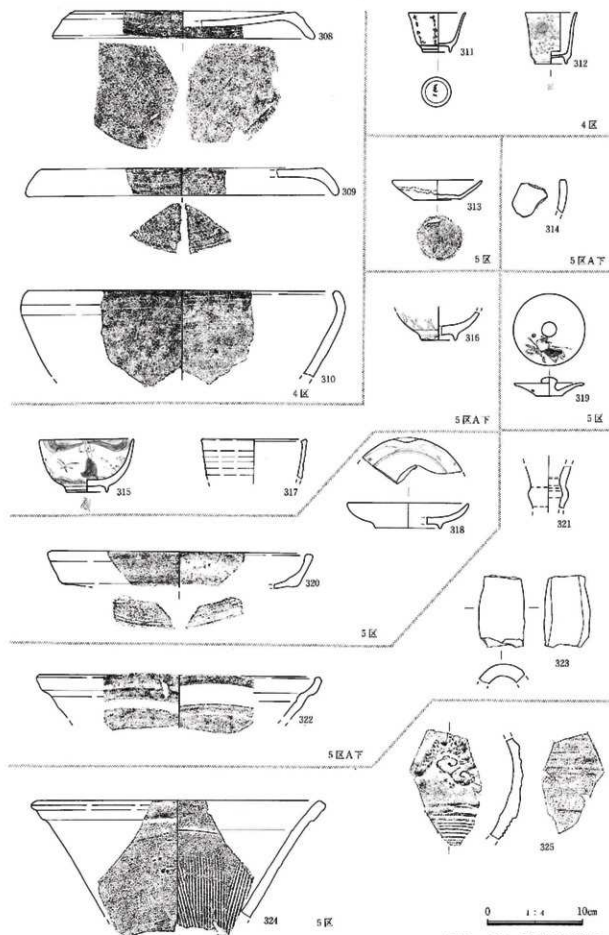


図56 4区、5区出土遺物

番号	品名	出土位置	法 定 単 位 cm. 及 び 特 徴
1	銅製環	5区洪水層	鑄造口径 (14.0) 鑄造品。赤褐色。口径はほぼ一定している。
2	土製壺	5区洪水層	壺の胴部。厚みあり。黄褐色。外面ヘラズリ。
3	銅製環	5区洪水層	鑄造口径 (8.0)。造元。灰白色。底部未切り離し未調整。
4	銅製壺	5区洪水層	壺の胴部。造元。灰白色。壺と口との間に接合痕あり。
5	銅製壺	5区洪水層	長頸壺の胴部。外面に口径はほぼ一定している。
6	土製壺	5区洪水層	鑄造口径 (7.0)。外部及び底部ヘラズリ。黄褐色。
7	土製壺	5区洪水層	壺の胴部。外面ヘラズリ。灰褐色。
8	土製壺	5区洪水層	壺の胴部。外面ヘラズリ。造元。灰褐色。黄褐色。
9	土製壺	5区洪水層	壺の胴部。外面ヘラズリ。灰褐色。
10	土製壺	5区洪水層	壺の胴部。外面ヘラズリ。黄褐色。
11	銅製環	5区洪水層	環の口径。やや丁寧な口径調整。灰褐色。やや軟質。
12	銅製小環	5区洪水層	口径 (6.0) 供具による給付。供具の色は濃い。瀬戸美濃。
13	銅製小環	5区洪水層	口径 (5.4)。器高 (2.7)。底径 (2.3)。非常に薄く、供具による給付。瀬戸美濃。
14	銅製壺	5区洪水層	口径 (10.0) 供具による給付。瀬戸美濃。
15	銅製壺	5区洪水層	口径 (10.0) 供具による給付。瀬戸美濃。
16	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
17	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
18	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
19	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
20	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
21	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
22	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
23	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
24	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
25	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
26	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
27	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
28	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
29	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
30	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
31	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
32	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
33	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
34	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
35	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
36	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
37	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
38	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
39	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
40	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
41	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
42	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
43	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
44	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
45	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
46	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
47	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
48	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
49	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
50	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
51	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
52	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
53	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
54	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
55	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
56	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
57	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
58	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
59	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
60	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
61	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
62	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
63	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
64	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。
65	銅製壺	5区洪水層	内外。コバルト供具による給付。

第Ⅲ章 検出した遺構と遺物

番号	部 種	出土位置・層位	注 記
66	瓦葺き跡	3FSD1-1, A下	非定口徑(32.2)、器高(6.0)、推定底径(29.2)並し検出。内耳縁にキリよりの空白。銅針金をつく。
67	軒平瓦	3FSD1-1, A下	標準瓦。中心飾りには水色黒い痕。いよし検出。断面は灰色。
68	平瓦	3FSD1-1, A下	いよし検出。断面は灰色。上面にガキに近いけずり。下面ヘラナジ、側面ヘラナジ。
69	平瓦	3FSD1-1, A下	いよし検出。断面は灰色。
70	組紐跡	3FSD1-1, 上層	呉須の給付。見込み手摺り五弁文付。外底部は浅溝が、肥前系。A型石より上層。
71	組紐跡	3FSD1-1, 上層	呉須による給付。給付の切取面あり。ここにややく五弁文。浅溝あり。A型石より上層。
72	組紐跡	3FSD1-1, 上層	呉須による給付。浅溝あり。A型石より上層。組紐跡。
73	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(10.0)、器高(3.0)、底径(6.0)並し検出。A型石より上層。以下30まで。
74	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(14.0)、器高(3.7)、推定底径(8.2)。呉須による給付。手摺り五弁文付。外底浅溝が。
75	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(12.6)外周へ開けり。伏縁外周、外底面都縁給付。見込みに重な検出。
76	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(32.5)赤黒。外周に急な底縁より突発。内面に1単位足即目。産地不詳、19世紀。
77	十貫目跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(28.0)、器高(6.0)、底径(6.0)並し検出。伏縁外周、外底面都縁給付。見込みに重な検出。
78	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(10.0)、給付。外周に二重銅針金。肥前系、18世紀。
79	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(10.0)、器高(4.9)、推定底径(5.1)。呉須による給付による給付。
80	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(12.0)、器高(5.7)、推定底径(5.3)。広重網、内外呉須による給付。
81	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(4.2)。呉須による給付。見込みに口黄丸の跡。肥前系。
82	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(11.0)呉須による給付。口縁浅溝。見込みに。
83	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(4.2)呉須による給付。外周には華文。見込みに浅溝手摺り五弁文付。肥前系。
84	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(13.0)、器高(3.1)、推定底径(7.2)。呉須による給付。肥前系。
85	組紐跡	3FSD1-1, 上層	非定口徑(17.0)呉須の給付外上縁は赤・黄・金。赤・金・明治。
86	瓦葺き跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(13.4)、器高(6.0)、推定底径(9.7)。浅溝の痕。見込みに浅溝。
87	組紐跡	3FSD1-1, 上層	口徑(1.8)外周に組紐に浅溝の給付。花文等。肥前系。
88	組紐跡	3FSD1-1, 上層	口徑(13.6)、器高(5.0)、底径(6.4)青銅。見込みに手摺りより。赤・黄・金・明治。
89	灯明皿	3FSD1-1, 上層	口徑(8.6)、器高(1.5)、底径(3.1)陶器。内面灰緑。口唇部に少しス・金・黄。
90	灯明皿	3FSD1-1, 上層	推定口徑(9.0)、器高(1.7)、推定底径(3.3)内面灰緑外周灰緑。口唇部に少しス・金・黄。
91	灯明皿	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.0)、器高(1.9)、推定底径(4.2)内面及び外周口唇部に少しス・金・黄。
92	灯明皿	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.0)、器高(1.0)内面に灰緑。口唇部に少しス・金・黄。
93	土海胆	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.0)、器高(1.2)、底径(4.2)。ロウロコ形底縁並し同様の彫り。産地不詳。
94	土海胆	3FSD1-1, 上層	推定口徑(4.2)、器高(4.9)、底径(4.9)。底縁部を除く灰緑。口唇部赤・金・黄。19世紀。
95	土海胆	3FSD1-1, 上層	口徑(8.0)、器高(5.0)、底径(4.7)。底縁部を除く灰緑。口唇部赤・金・黄。19世紀。
96	陶器片	3FSD1-1, 上層	推定口徑(11.9)、器高(9.2)、推定底径(10.7)底面・内面・口唇部灰緑。他は灰緑。
97	陶器片	3FSD1-1, 上層	推定口徑(22.6)、底面を除く灰緑。底縁部を除く。瀬戸系。
98	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(9.4)、器高(4.9)、底径(3.8)呉須による給付。肥前系、18世紀。
99	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(10.0)、器高(5.0)、推定底径(3.9)呉須による給付。浅溝あり。
100	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(12.5)、器高(7.1)、底径(5.2)呉須による給付。瀬戸系。
101	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(11.1)、呉須による給付。瀬戸系。外周は、やや深溝を帯びている。瀬戸系。
102	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(5.9)、器高(3.4)、底径(3.4)。灰緑。呉須による給付。
103	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(9.3)、包絡(約)浅溝。肥前系。
104	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(10.6)、包絡(約)浅溝。
105	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.8)呉須による給付。タコ音草文。浅溝。
106	組紐跡	3FSD1-1, 上層	口徑(6.7)、器高(5.3)、底径(4.3)。呉須による給付。陶器。浅溝。
107	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(13.8)、器高(2.6)、推定底径(8.8)外周灰緑。内面灰緑/目録跡。見込みにタコ音草文。
108	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(10.8)、器高(3.3)、推定底径(6.2)呉須による給付。瀬戸系。
109	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(11.7)、器高(3.8)、推定底径(8.8)呉須による給付。瀬戸系。
110	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(10.8)、外周縁。呉須による給付。足付高台。
111	組紐跡	3FSD1-1, 上層	推定口徑(32.0)、器高(5.6)、推定底径(19.6)呉須による給付。やや呉須が濃い。
112	組紐跡	3FSD1-1, 上層	呉須の給付。器底に浅溝。浅溝。
113	陶器片	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.8)、器高(5.4)、底径(3.5)。灰赤砂文。灰緑。京・信濃。
114	陶器片	3FSD1-1, 上層	推定口徑(3.2)、灰緑。上縁(約)浅溝。
115	陶器片	3FSD1-1, 上層	灰赤を除く灰緑。黒入あり。
116	組紐跡	3FSD1-1, 上層	6.2x4.6x2.2。中央に黒入。端部に水欠。底付り。重層に赤黒。コバルト片。
117	組紐跡	3FSD1-1, 上層	口徑(6.3)、器高(3.3)、底径(3.3)。外周灰緑。呉須による給付。くずしたタコ音草文。
118	灯明皿	3FSD1-1, 上層	推定口徑(11.0)、器高(1.9)、推定底径(4.6)。外周を除く灰緑。給上灰緑。
119	灯明皿	3FSD1-1, 上層	推定口徑(8.2)、器高(1.7)、底径(3.3)内面から外周口唇部まで灰緑。口唇にス・金・黄。
120	灯明皿	3FSD1-1, 上層	口徑(8.0)、器高(1.7)、底径(3.3)内面から外周口唇部まで灰緑。
121	土海胆	3FSD1-1, 上層	底面(4.3)、底径(4.3)内面及び外周口唇部は無縁。他は灰緑。瀬戸系。
122	土海胆	3FSD1-1, 上層	口徑(5.0)、器高(4.2)、底径(3.9)底面無縁。他は灰緑。
123	陶器片	3FSD1-1, 上層	口徑(5.0)、器高(4.3)、底径(4.3)カンナク型。灰緑。
124	組紐跡	3FSD1-1, 上層	口徑(4.1)、器高(3.0)、底径(1.8)底面赤。上縁(約)。
125	土海胆	3FSD1-1, 上層	口徑(4.1)、器高(3.0)、底径(1.8)底面赤。上縁(約)。
126	土海胆	3FSD1-1, 上層	底面赤。上縁(約)。
127	土海胆	3FSD1-1, 上層	陶器。外周灰緑。
128	土海胆	3FSD1-1, 上層	上面につまみあり。器底に浅溝。無縁。上面に黄色あり。給の浅溝が。産地不詳。
129	陶器片	3FSD1-1, 上層	口徑(8.2)、器高(7.4)、底径(7.2)。手摺り及び口縁がつく。外周底縁を除く灰緑。産地不詳。
130	陶器片	3FSD1-1, 上層	推定口徑(27.5)、底面を除く灰緑浅溝。瀬戸系。

番号	部 種	出土位置・層位	注 記
131	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	施土。茶褐色。内外白色の陶片。遺物。
132	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	内外灰緑。黄白色。細い貫入あり。瀬戸系。
133	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	非定口徑(5.0)外周縁。細い貫入あり。内面無縁。瀬戸系。
134	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	陶器片。肥前系、18世紀。
135	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(31.5)砂網など浅溝が多い。浅溝。浅溝・信濃。
136	瓦葺き跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(22.0)青銅。いよし検出。外周縁は黄。上面にガキ。内面口コナジ。在地。
137	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	口徑(1.4)、器高(0.7)、底径(0.7)。底径(0.7)。
138	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(4.0)、呉須による給付。肥前系、18世紀前半。
139	瓦葺き跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(13.0)いよし検出。やや浅溝。外周に口コナジ。下部灰赤。在地。
140	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(12.6)、器高(7.8)、底径(4.8)底面を除く灰緑。瀬戸系。17世紀末～18世紀前半。
141	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(12.0)白土。灰赤。内外灰緑。瀬戸系。17世紀後半。
142	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(9.7)陶器。灰赤・緑。口唇や深く。内外灰緑。18世紀前半。
143	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	底径(4.3)高台無縁。台形ノコリ。見込みに口コナジ。肥前系、18世紀前半。
144	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	外周縁。内面縁の痕。内面縁。青銅。青銅下に見損あり。肥前系。
145	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	内外灰緑。細い貫入あり。瀬戸系。
146	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	内外灰緑。内外縁の痕。瀬戸系。
147	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(12.0)天目蓋。瀬戸系。18世紀前半。4片あり。埋没なし。
148	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	底径(4.9)。胎土褐色。黄白色の灰緑。底面縁。草書で「清水」とあり。京焼地。肥前系、18世紀。
149	陶器片	5FSD1-1 柱穴内	丸皿。内外灰緑。瀬戸系。17～18世紀。
150	瓦葺き跡	5FSD1-1 柱穴内	平瓦。外周いよし。器高(0.7)。
151	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(10.0)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
152	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
153	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
154	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
155	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
156	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
157	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
158	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
159	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
160	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
161	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
162	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
163	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
164	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
165	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
166	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
167	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
168	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
169	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
170	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
171	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
172	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
173	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
174	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
175	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
176	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
177	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
178	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
179	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
180	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.5)器高(1.8)底径(1.8)内周。15単位。瀬戸系。18世紀。
181	瓦葺き跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(23.0)内外いよし。断面は茶褐色。外周及び底縁は黄。内面口コナジ。在地。
182	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(10.7)、器高(12.3)、推定底径(6.0)外周縁がかった灰緑丸皿。瀬戸系。17世紀。
183	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	口徑(9.3)、器高(4.6)、底径(4.6)内周及び外周縁部。浅溝。19世紀前半。
184	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(8.2)、器高(5.7)、底径(4.8)内外灰緑。上縁(約)京・信濃。18世紀後半。
185	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(8.2)、器高(5.7)、底径(4.8)呉須による給付。肥前系。
186	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(3.6)、呉須による給付。色が濃い。見込みに手摺り五弁文。
187	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(10.6)、器高(5.7)、底径(4.8)呉須の給付。呉須の色が濃い。浅溝。19世紀。
188	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(8.8)、器高(3.2)、呉須の給付。呉須の色が濃い。浅溝。19世紀。
189	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(13.2)、器高(3.8)、推定底径(6.8)呉須による給付。見込みに手摺り五弁文。
190	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(10.6)、器高(3.2)、底径(4.8)呉須による給付。呉須の色が濃い。浅溝。
191	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(5.4)陶器片。
192	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	底径(3.3)、底面を除く内外灰緑。京焼地。
193	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(4.8)。外周縁部を除く灰緑。内面口コナジ。瀬戸系。
194	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	推定口徑(10.0)。底縁部。内周及び外周縁部上縁。下縁は灰緑。肥前系。
195	組紐跡	5FSD1-1 柱穴内	口徑(6.2)、器高(2.1)上面に浅溝。上面につまみあり。給付の痕。肥前系。

序号	部 位	寸法(單位)	注 意 事 項 及 其 特 徴
196	陶 像	3.5SD3	扉面底座(10.2) 外廻邊溝を設けて瓦葺。瓦は白堊を染め流し置き。
197	陶部不明	3.5SD3	外廻邊溝附(嵌) 内面瓦葺。外廻邊溝。
198	磁器鉢	3.5SD3	口徑(2.1) 中環。胴部瓦葺の附。戸蓋溝、19.9センチ。
199	陶器高足瓶	3.5SD3	外口に呉漆附。呉漆はなくなりころこ。彫像はとれている。
200	灯明石	3.5SD3	口徑(9.8) 内面瓦葺が口徑より上まで。彫像、19.9センチ。
201	土師器	3.5SD3	扉面底座(14.0) 瓦。外廻邊溝。流し置き瓦葺の口徑、19.9センチ。
202	土師器鉢	3.5SD3	口徑(10.2) 中環。外廻邊溝。流し置き瓦葺の口徑、19.9センチ。吊手紐状のものをしてけり。在座。
203	陶部漆鉢	3.5SD3	扉面底座(32.0) 内外瓦葺。外廻邊溝。流し置き瓦葺の口徑、19.9センチ。
204	陶部漆鉢	3.5SD3	開座(13.8) ココタン瓦葺。外廻邊溝。流し置き瓦葺。19.9センチ。
205	陶部漆鉢	3.5SD3	扉面底座(30.5) 軸土黄白。外口瓦葺。瓦葺。開座溝附、19.9センチ。
206	陶部水甕	3.5SD3	扉面底座(38.0) 外廻口付。外廻底溝なし。扉面瓦葺。19.9センチ。
207	軒瓦板	3.5SD3	軒瓦板の瓦面付。扉面瓦。書入部。
208	磁器鉢	3.5SD4	扉面底座(10.2) 呉漆より上まで。彫像の口徑なし。凹溝、19.9センチ。
209	土師器	3.5SD4	扉面底座(10.0) 灰白。外口瓦葺。ワコ器附。底面底溝附、19.9センチ。
210	瓦葺	3.5SD4	口徑(9.2) 瓦葺。口徑より上まで。彫像の口徑なし。凹溝、19.9センチ。
211	平瓦	3.5SD4	外廻口なし。ヘラにより上まで。彫像の口徑なし。凹溝、19.9センチ。
212	編み葺	3.5SK3	扉面底座(9.0) 瓦葺(3.9) 瓦葺の口徑。呉漆の口徑なし。凹溝、19.9センチ。
213	陶部小鉢	3.5SK3	扉面底座(11.2) 内外瓦葺。内面瓦葺なし。
214	陶部鉢附	3.5SD3	扉面底座(30.0) 内外瓦葺。内面に細かく凹溝。扉面瓦葺。
215	土師器葺	3.5SK3	扉面底座(24.0) 葦器(3.0) とは裏面まで。ワコ器附。底、酸化面。在座。19.9センチ。
216	磁器小鉢	3.5SD3	扉面底座(8.0) 葦器(4.1) 扉面底座(3.8) ココタン瓦葺。凹溝なし。
217	磁器小鉢	3.5SD3	扉面底座(8.0) 葦器(3.0) 底座(7.3) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。
218	磁器小鉢	3.5SD3	口徑(7.0) 葦器(3.0) 底座(4.0) 底座(4.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。
219	陶部小鉢	3.5SD2	口徑(5.0) 葦器(3.9) 底座(3.3) 内外瓦葺。外廻口付。凹溝なし。
220	陶部筒口	3.5SD2	扉面底座(6.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。外廻口付。凹溝なし。
221	磁器鉢	3.5SD2	扉面底座(12.0) 葦器(2.0) 底座(8.1) 呉漆の口徑なし。凹溝なし。
222	磁器葺葺	3.5SD2	扉面底座(11.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。口徑無瓦葺。
223	急須蓋	3.5SD2	口徑(5.8) 高さ(2.1) 224の葦器。高さ、底面、底面不葺。
224	急須	3.5SD2	口徑(2.0) 葦器(5.0) 底座(3.0) 凹溝の口徑なし。底面底溝なし。
225	瓦葺	3.5SD2	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
226	瓦葺七厘	3.5SD2	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
227	土師器土甕	3.5SD2	扉面底座(23.2) 葦器(4.0) 底座(4.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。口徑なし。
228	瓦葺土甕	3.5SD2	扉面底座(23.2) 葦器(4.0) 底座(4.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。口徑なし。
229	瓦葺鉢鉢	3.5SD2	扉面底座(23.2) 葦器(4.0) 底座(4.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。口徑なし。
230	瓦葺鉢鉢	3.5SD2	扉面底座(23.2) 葦器(4.0) 底座(4.0) ココタン瓦葺に上まで。凹溝なし。口徑なし。
231	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
232	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
233	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
234	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
235	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
236	ガラス瓶	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
237	下駄	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
238	下駄	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
239	陶 像	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
240	陶像鉢附	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
241	陶像鉢附	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
242	陶像鉢附	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
243	葦器	3.5SD1 A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
244	葦器蓋	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
245	葦器	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
246	葦器	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
247	葦器	3.5SD1 A A	口徑(16.7) 葦器(8.3) 底座(8.3) 内面及び外口の底面を設けて鉄板。内面に土を置き瓦葺。
248	葦器	3.5SD1 A A	口徑(16.7)

[illegible]

第IV章 真町I遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 真町I遺跡の地質とテフラ

1. はじめに

高崎台地上に位置する真町I遺跡の発掘調査では、2層準から水田遺構が検出されるとともに、良好な地質断面が作成された。そこで地質調査とテフラ検出分析を合わせて行い、土層の層序を記載するとともに示標テフラの層位を明らかにして、遺構の形成年代および土層の形成年代に関する資料を収集することにした。調査分析の対象とした地点は、A地点およびB地点の2地点である。

2. 地質層序

(1) A地点(基本土層A地点)

この地点では、下位より暗灰色砂質土(層厚12cm以上)、黒泥層(層厚6cm)、灰色軽石混じり黒色土(層厚5cm、軽石の最大径5mm)、桃白色シルト層(層厚4cm)、暗灰色土(層厚5cm)、灰色土(層厚4cm)、黄灰色土(層厚8cm)、白色軽石混じり灰黄色土(層厚27cm)、黄灰色土(層厚6cm)、灰色砂質土(層厚9cm)、灰白色軽石および砂混じり灰色砂質土(層厚14cm、軽石の最大径3mm、礫の最大径27mm)、灰白色軽石混じり灰色砂質土(層厚13cm、軽石の最大径3mm)、黄灰色土(層厚8cm)、灰色砂質土(層厚5cm)、黄褐色表土(層厚8cm)が認められる(図1)。これらのうち、上位より5層目と4層目に含まれる灰白色軽石は、その岩相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に由来すると考えられる。

(2) B地点(基本土層B地点)

この地点では、下位より灰色砂質土(層厚10cm以上)、黒泥層(層厚4cm)、灰色軽石混じり黒色土(層厚4cm、軽石の最大径3mm)、灰色土(層厚6cm)、黄灰色土(層厚11cm)、暗灰色土(層厚6cm)、成層したテフラ層、灰色砂質土(層厚10cm)、灰白色軽石を多く含む灰色砂質土(層厚24cm、軽石の最大径11mm)、灰白色軽石を多く含む灰色砂質土(層厚17cm、軽石の最大径9mm)、暗灰色表土(層厚32cm)が認められる(図2)。これらのうち、上位より3層目に降灰層準のあると考えられる灰白色軽石は、その岩相からAs-Aに由来すると考えられる。

また成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、かすかに成層した褐色粗粒軽石混じり暗灰色粗粒火山灰層(層厚5cm、軽石の最大径12mm)から構成されている。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、新井, 1979)に同定される。この地点では、このAs-Bの直下から水田遺構が検出されている。なお発掘調査では、さらにAs-Bの下位の灰色土から9世紀の土器が検出されており、この土層の直下からも水田遺構が検出されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法略

(2) 分析結果

真町I遺跡のテフラ検出分析結果を、表1に示す。A地点の試料番号2には、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石が少量含まれている。軽石の最大径は2.2mmである。底品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、新井, 1979)に由来すると考えられる。したがって、B地点において、9世紀の土器が検出された灰色土の直下の黒色土中に多く含まれている灰色軽石もAs-Cに由来すると考えられる。一方試料番号1には、スポンジ状に比較的によく発泡した白色軽石が少量含まれている。軽石の最大径は1.1mmである。この軽石は、堆積物の層相をも合わせて考慮すると、その特徴から6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井, 1962、坂口, 1986、早田, 1989、町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。したがって、桃白色シルト層については、Hr-FPが堆積した後に発生した洪水堆積物(早田, 1989)の可能性が大きいと考えられる。

4. 小 結

真町I遺跡において、地質調査およびテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、6世紀中葉)起源の洪水層、洪水層起源の土層(9世紀?)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)、浅間A軽石(As-A、1783年)などの層位が認められた。真町I遺跡で検出された2層準の水田遺構は、洪水層起源の土層(9世紀?)とAs-B直下に各々層位がある。

文 献

- 新井房夫(1962)関東東部北西部地域の第四紀層序、群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス、東京大学出版会, 276p.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器、群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究, 27, p.297-312.

第2節 真町I遺跡の植物性炭酸体(プラント・オパール)分析

1. 試 料

真町I遺跡の発掘調査では、As-B直下などから水田遺構が検出された。ここでは、これらの遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

2. 試 料

試料は、A地点で5点、B地点で1点の計6点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法 略

4. 分析結果

水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ類、ヨシ属、ススキ属、タケ亜科(おもにネズサ節)の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 稲作の可能性について

水田跡(稲作跡)の検証や探索を行う場合、一般にイネの植物性炭酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) A地点(図1)

洪水層起源の土層(9世紀?)の下層(試料1~3)と榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、6世紀中葉)起源の洪水層の直下層(試料4)、浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)混層(試料5)について分析を行った。その結果、試料1~4からイネが検出された。密度は、試料1では7,400個/gと高い値であり、その他の試料でも5,000個/g前後と高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) B地点(図2)

水田遺構が検出された浅間Bテフラ(As-B、1108年)直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネが6,000個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

5. 植物性炭酸体分析から推定される植生・環境

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ウシクサ族(ススキ属など)やタケ亜科は比較的乾いたところに生

有している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、下位層を中心にヨシ属が比較的多く検出され、ウシクサ族（ススキ属など）やタケ亜科も検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右欄）によると、浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）泥層より下位ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属が多く生育する湿地的な状況であったと考えられ、榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 6世紀中葉）起源の洪水層の直下層の時期にそそを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。

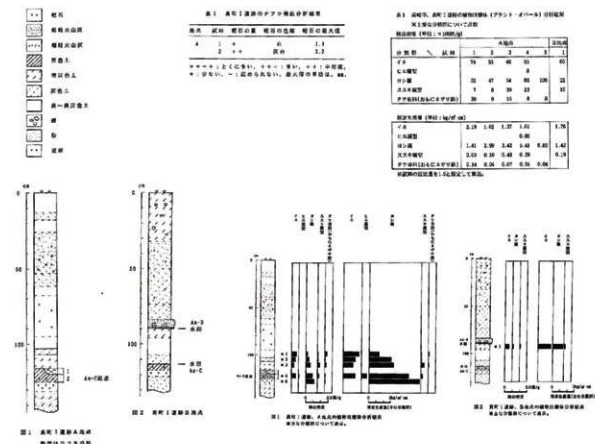
6. まとめ

以上のように、水田遺構が検出された洪水層起源の上層（9世紀?）の直下層および浅間Bテフラ（As-B, 1108年）直下層では、イネが多量に検出され、各遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 6世紀中葉）起源の洪水層の直下層でも稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

本遺跡では、榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 6世紀中葉）起源の洪水層の直下層の時期に、ヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の調査―。考古学と自然科学, 17, p.73-85.



第V章 調査の成果と課題

1 X層下水田跡について

今回の調査では、浅間B軽石下水田跡より下層で、シルト質の土壌（X層）に覆われた水田跡を検出した。水田跡を覆うX層は粒子が均一であり、またその堆積の様子から洪水堆積物と考えられる。X層の上のIX層も何層かに分割でき、これも洪水と見られる。

5区と6区のX層下水田跡の上層には水田跡がある。1108年に噴出されたと推定される浅間B軽石に埋没した遺構であり、X層下水田の埋没は少なくともこれよりはるかに後段である。X層及び水田面から出土した土器のうち6区の須恵器壺は8世紀と見られる。土師器の壺片は、頸部がコノ字形をしており、また須恵器の坪はやや深めで外面に口ロ痕が明瞭であり9世紀段階と考えられる。

5区の西部には、X層下部に桃白色シルト層がある。古環境研究所の報告書によれば（X層の上の）IX-3層中の軽石はその特徴から、6世紀中葉に榛名山から噴出した榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）に由来し、桃白色シルト層は、Hr-FPが堆積した後に発生した洪水堆積物（早田, 1989, 註1）の可能性が高いとのことである。この結果を踏まえると、X層は桃白色シルト層より上層であり少なくとも6世紀中葉以降となる。なお桃白色シルト層は、5区の西部にブロック状に残るものであり、水田を破壊させ全体を覆うのはX層である。

Hr-FA ないし Hr-FP に伴う土石流や洪水層は、箕郷町・群馬町や高崎北部の浜川戸田貝戸跡路（註2）付近に厚く堆積している。また、高崎市部でも浜川地区に近い並根北遺跡（註3）・並根北II遺跡（註4）・上並根下松遺跡（註5）などで、Hr-FA に覆われた水田跡が検出されている。また、並根北II遺跡では、Hr-FA 層の上に同層が認められ、その上部は Hr-FP に伴う洪水と考えられる。こうした6世紀の榛名山の大噴火に直接伴う洪水をA類とする。

一方、榛名山の噴火とは直接関係しないが、Hr-FA や Hr-FP に土質が似た洪水が起こったことが高岡村前遺跡で確認されている（註6）。上大野野地水田跡（註7）においても同様である。これらをB類とする。

東町IV遺跡（註8）では、A類かB類かははっきりしないが、Hr-FA 洪水後、その上につくられた水田跡が発見されている。畦畔は幅0.7m高さ0.1mで、東方向に一方向に走る。これはその後、洪水堆積物によって埋没されている。水田跡を覆う土層のテフラ分析では Hr-FP に伴う洪水の可能性が高いという。しかし出土する土器は8世紀段階であり、東町IV遺跡の水田跡を襲った洪水は、榛名山の噴火とは関係のないB類と考えられる。

6世紀段階で榛名山は2回大噴火洪水も起こっている。しかし、高崎の東部地区は榛名山からはかなり離れており、噴火直後の噴火に伴うA類の洪水よりも、やや時間を経た Hr-FA や Hr-FP の二次洪水が起こった可能性が高い。こうしたB類の洪水は、高岡町付近では7世紀～9世紀頃まで3回、上大野では9世紀頃に1回、東町付近では8世紀頃に1回の洪水が起きたことになる。

Hr-FP に覆われた代表的な水田跡には、御市呂遺跡（註9）や戸田貝戸跡路などがある。また萩原団地遺跡（註10）は、A類の洪水層に覆われたものである。これらの水田跡は、大畦畔で囲われた内部に登1～2枚程度の区画があり、Hr-FA 段階と水田造成技術が共通している。こうした例に対し、B類の洪水に覆われた真町I遺跡の水田跡は、1辺が7～8mであり畦も規模が大きい。5区や3区では畦が北を向き、6区では南北の畦を軸として区画がなされている。水田跡の形態はA類の洪水下とは異なっている。

X層上部のX-1層で採取した資料2と、下部のX-2層で採取した資料3のイネのプラントオパールはともに値が高い。また、IX層の下部となるIX-3層から採取した資料1も値が高い。プラントオパールの値が高いのは、洪水で土壌を放棄したのではなく、比較的早い段階で復興された結果と考えられる。IX層やX層での復興が早いとすると、地層は安定したものではなく異質な層による揺動が考えられ、後世の遺物が混入も考えなければならない。

真町I遺跡付近のX層下はかなり平坦である。洪水土は西の5区が厚く、6区や東の旭町I遺跡では層が薄

い。洪水の中心は西方と考えられる。東町付近まで行くとい洪水層がかなり厚くなり、その東の栄町Ⅰ遺跡（註11）では逆に洪水層は薄い。高岡村前遺跡では、遺跡の南半部は洪水層がなく北半部に洪水堆積土が厚い傾向にある。こういうように、B類の洪水の厚さは場所によってかなり差があり、出土する土器も時間幅があることから年代も様々と考えられる。B類の洪水は大規模ではなく、小さいものが断続的に起きたと考えられる。B類の洪水層で埋没した水田跡は、出土する土器によっておおよその年代を知ることが出来る。しかし土器が小破片であったり、後世の混入のことで考えると確実な年代を求めるのは困難である。しかし、それぞれの地点で土器と土器の照合作業を行い、時期ごとの洪水範囲と年代の復元することでより確実が増し、そうした作業は、6世紀以降の土地変遷や水田造成技術の変遷の復元につながるものと考えられる。ちなみに、本遺跡周辺の洪水層は、8～9世紀の土器が中心であり、水田の埋没年代はおおよそ9世紀頃と推定される。

2 浅間A軽石再堆積下遺構について

調査区6の6区で、浅間A軽石を主体とする層に埋没した水田跡を検出した。軽石層は純層ではなく細かい褐色土ブロックが含まれる。そのため、軽石に覆われた面は天明の噴火時の状態ではないと考えられる。

6区はA軽石の層が厚く、軽石の除去作業はされていない。一方、6区のすぐ東の旭町Ⅰ遺跡では軽石は除去され、A軽石は掘削された様子である。また、真町Ⅰ遺跡の1～5区では基本的には軽石の除去作業を行っている。

A軽石は天明の噴火（1783年）によるものだが、6区の軽石層には19世紀段階の陶磁器が入っている。陶磁器は軽石中に混入したと考えられる。軽石を割くと、銅・銀鍍が明確である。混入は、この銅・銀による復興時のものと考えられる。跡地よりも新しいSK40から出てきている。明治10年頃から大正にかけて流行した型紙摺による碗である。この碗には、寛政（1789～1800）頃から幕末頃まで行われたという「焼鑑」が見られる。銅・銀鍍はこの磁器より少なくとも古い段階であり、銅・銀鍍、つまり復興は19世紀～幕末頃と推定される。

6区の軽石下には畦が明確に残っており、軽石が噴出した天明3（1783）年までは水田であったと推定される。1～5区は、掘立柱建物跡や井戸などがある居住の場所である。SD1「遺構」は、東の水田地帯と西の居住区である城下町を大きく区切っていたと考えられる。

3 「遺構」と高崎城二ノ丸堀との類似性

SD1は、調査区の最北の1区から2区・3区・4区で検出された。南北方向に走る帯は、全体を覆っていないのであくまで推定値であるが、上堀5.2m程度、深さ1.5mと大規模であり、検出位置から城下町を囲んだとされる「遺構」と考えられる。最北となる1区の北隅での堀底の標高は92.34m、最も南で調査した4区の南隅では92.36mであった。堀底は、殆ど傾斜がなかったと考えられる。堀底は、1区と3区で敷堀、4区では障子堀となっていた。堅い地山を掘り出したもので、少しらしい水流では崩れないと思われる。「遺構」は、水を入れた様子が見られ、おそらく長野県から水を引き入れたと考えられる。しかし、水を入れたにも関わらず、1区の南端では25cm、3区では31cm程度、流れに逆らうように堀底に段差を持たせている。堀底には、黒味を帯びた粘性も強い土が堆積し、堀底付近は、流れのような状況であったと考えられる。堀底に障子堀や敷堀とし、部分的に段差を設けたのは、意図的に水の流れるを阻害するためであったと推定される。

敷堀及び障子堀は全体的に傾斜が増加しているが、本遺跡の障子堀は小田原城B2類の範疇である。水堀内部に障壁や段差を設け粘性の強い土を堆積させ、堀の内部で敵の移動を困難にする、中世から近世にかけての軍事的なものと考えられる。本遺跡では、「遺構」の内側に土塁が確認される。「遺構」と土塁とで戦時に備えたのであろう。なお、高崎城の二ノ丸堀（註12）も、堀底に敷堀と障子堀がある。この障子堀も小田原城B2類という。高崎の城下町全体を囲む「遺構」と、高崎城の二ノ丸堀とは堀の掘削技術に類似性があり、掘削時期も同じ頃であった可能性が高い。

4 近世の遺構と遺物の傾向

5区は、位置的には城下町内部となる。狭い調査区ながら3種の建物跡を検出した。建物跡SB2は一番古く、SB1とSB5とはそれぞれ新しい遺構である。しかし、いずれも浅間A軽石が降下する以前の遺構である。SB1は、掘立と礎石という二通りの技術が混在した建物跡と考えられるが、SB2とSB5は掘立柱建物跡である。井戸は1基検出した。SE1は18世紀初め頃まで使われ意図的に埋められている。このSE1に重なるように棚列SA2があるが、SE1がSA2のピットを切るため、棚列SA2よりも井戸SE1が新しいと考えられる。なお棚列は東西方向に一直線に走っており、敷地を区切るものと考えられる。19世紀段階になると、SD1「遺構」は埋没して形もわからなくなり、かつて「遺構」が担っていた水路としての役目は、SD25に引き継がれる。3区においてSD25には、SD3、SD4などの溝跡となる。これらは排水施設であろうし、真町内部に人が生活していたことを物語る。

遺物は陶器、磁器、瓦質土器、土質土器、木器、金属器と豊富である。17世紀の遺物は丸皿など瀬戸美濃が中心で、一部唐津があるが陶器が主体である。18世紀段階では、肥前系の磁器の割合が増してくる。陶器は瀬戸美濃が主体で種類も多い。19世紀になると、磁器は瀬戸美濃製品も多くなり、陶器は瀬戸美濃以外の産地からの供給が増してくる。瓦質土器は焙烙があるが、66は破損した側面に孔をあけ、銅線によってつないでいる。焙烙は欠け口がびつたり合わなくても使用出来たことになり、焙烙は内部に液体を入れるような使い方をしなかったと考えられる。

木器はSD1からの出土が多い。238の下駄は長さ18.7cmとやや小形で、女性らしい子供用と考えられる。釘穴が7箇所あるが、そのうち6箇所に釘が残存している。鼻緒を通す孔がなく、下駄の表面に草履のようなものを敷き、それを釘でとめたと考えられる。なお、底の左側先端がややすり減っているため左足用と考えられる。出土した木製品は、表面に鉋をかけた痕跡を残すが、256の板は鉋とは異なる工具で表面を削った痕跡が残っている。材は「水濡に耐える」アカマツであり、建築材と考えられる。金属器は、煙管と用途不明の金具がある。SB5の柱穴周上内からは煙管の先端が、SK26からは煙管の吸い口が出土している。ちなみに、SB5は天明の浅間山噴火以前、SK26は18世紀末頃の遺構である。

註1 早田勉「6世紀における権名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 1989

2 高崎市教育委員会「深川芦田貝戸遺跡」1994

3 高崎市教育委員会「並根北遺跡」1988

4 高崎市教育委員会「並根北ⅢⅣ遺跡」1996

5 高崎市教育委員会「上並根下松遺跡」1991

6 高崎市教育委員会「高岡村前Ⅱ高岡東沖・村前遺跡」1995 高岡村前遺跡の3区では、Hr-S（Hr-FAと同じ）

ないHr-I（Hr-FPと同じ）に伴うと考えられる洪水堆積物がある。そしてこれに吊橋、住居跡、溝跡などが埋没している。遺構との関係から、洪水は少なくとも3回は起きたと考えられる。なお、最初の洪水でも6世紀後半の土器が多数に出土する32号溝を覆う。そのため、洪水は6世紀中葉と推定される標名山噴火直後ではなく、幾分時間たった段階と考えられる。なお、最上層の洪水堆積層中からは9世紀段階の土器が出土しており、平安時代頃の頃までHr-FAやHr-FPにその質が似た洪水があったことが知られる。

7 高崎市遺跡調査会「上大野野地田遺跡」1995

8 高崎市教育委員会「東町Ⅰ遺跡」1995

9 高崎市教育委員会「南戸遺跡」1980

10 高崎市遺跡調査会「萩原田遺跡」1993

11 高崎市遺跡調査会「栄町Ⅰ遺跡」1996

12 高崎市教育委員会「高崎城三ノ丸遺跡」1994



5区浅間B畦石下水田跡 東から



浅間B畦石下畦跡 南東から



6区浅間B畦石下水田跡 南から



浅間B畦石下畦跡 東から



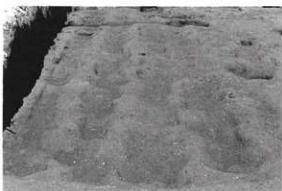
6区浅間A畦石再灌積下遺構 北から



中央付近の畦と農痕 南東から



中央畦畔と地層の様子 東から



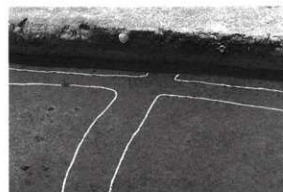
水田面の陥痕 中央から北を望む



3区X層下水田跡の畦畔 南から



5区X層下水田跡 南東から



6区X層下水田跡 東から



6区X層下水田跡全景 北から



6区X層下部出土須恵器壺片(4)



6区X層下水田面出土須恵器壺(3)

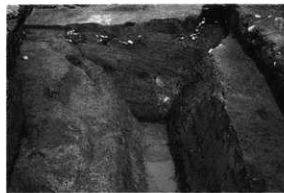


6区X層下部出土須恵器壺(5)



浅間B畦石下水田土壌の下位の灰色土壌がX層

写真図版 3



1区SD1「透構」と地層 南から



左写真の接写 堀の右部分は未発掘



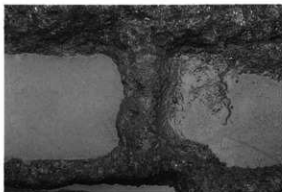
2区SD1 南から



3区SD1 北から 堀底に段がある



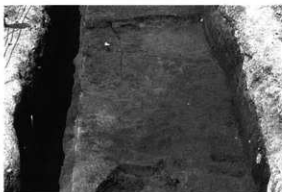
4区SD1堀底の様子 南から



4区SD1堀底(梯子堀)接写 東から



5区SD8 右は土層の崩れた土層 北から

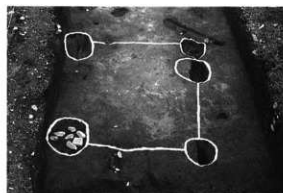


5区土器構築のための整地部分 東から

写真図版 4



5区SB1 東から



5区SB1 西から



5区近世下面全景 東から



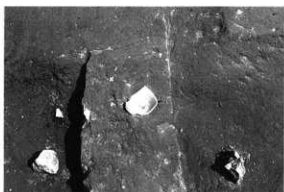
5区SB2 東から



5区SB2手前はSD19 西から



5区SA2 構の先端の痕跡



5区SK25遺物出土状態 南から



5区SE1 南から

写真図版 5



3区近代遺構面 北から



3区SD3遺物出土状態 南から



3区SD3 東から



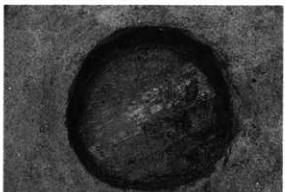
3区SD3・SD5・SD6 南から



3区SD5陶器(183)出土状態 南から



3区SK3と遺物出土状態 西から



5区SK15(底に板が残る) 東から



5区SD19全景 南東から

写真図版 6



5区SD19・SK26 南から



3区SD1・木製碗(240)出土状況



1区SD2 南から



1区SD2 図化作業



1区SD2 杭と横板による土止め状況 東から



1区SD2 土止めの状況接写 東から

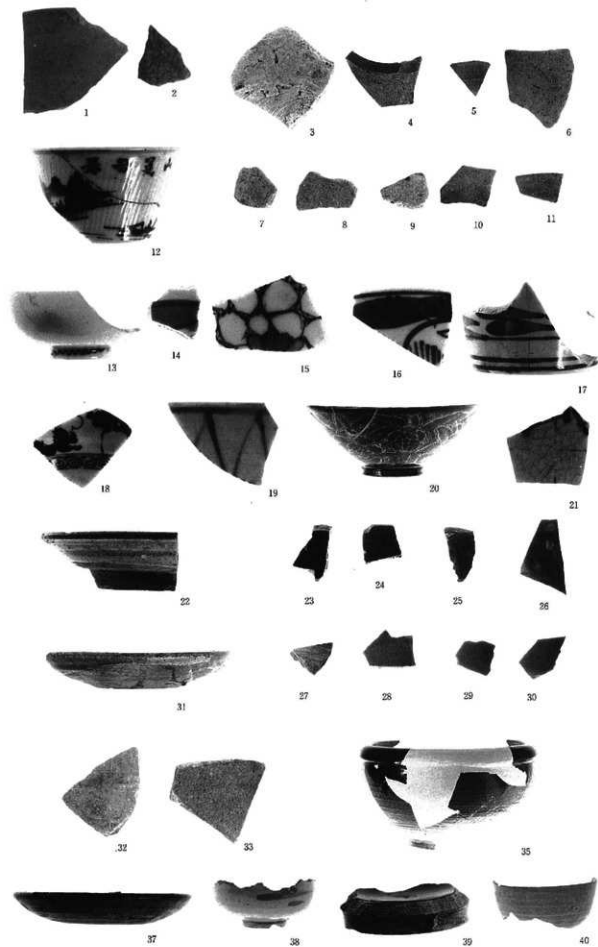


4区近代面全景 北から



4区近代面の土坑と排水 西から

写真图版 7



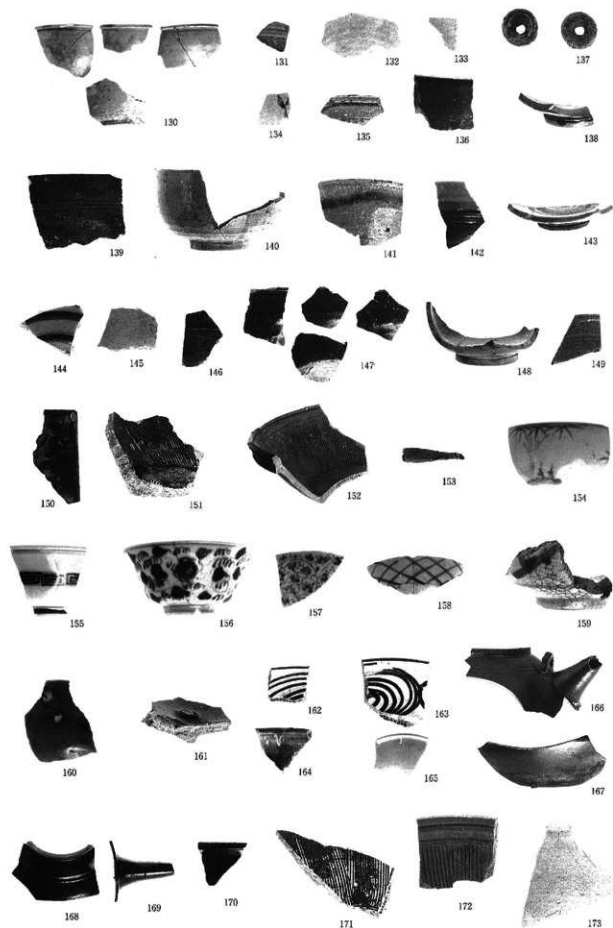
写真图版 8



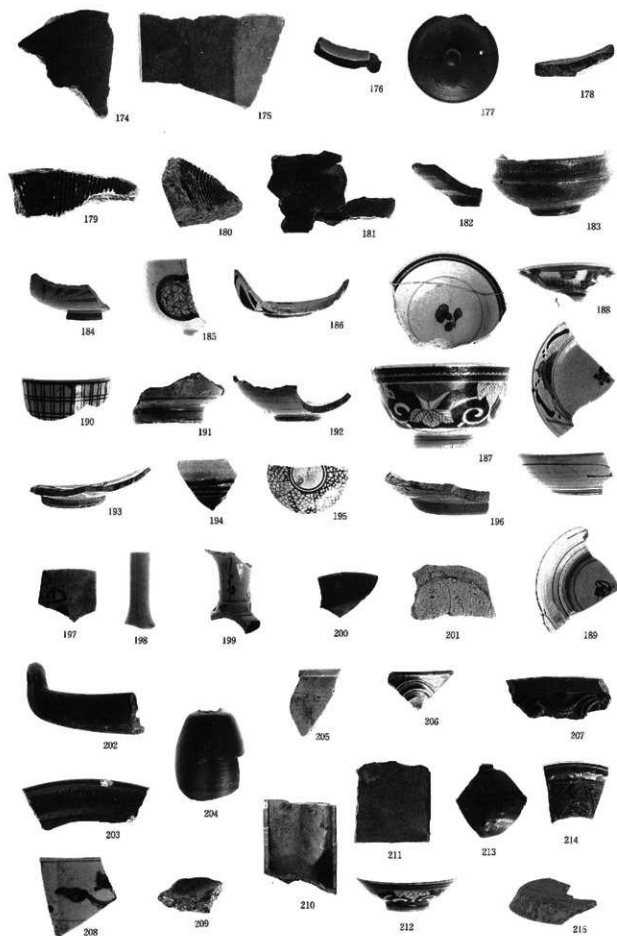
写真図版 9



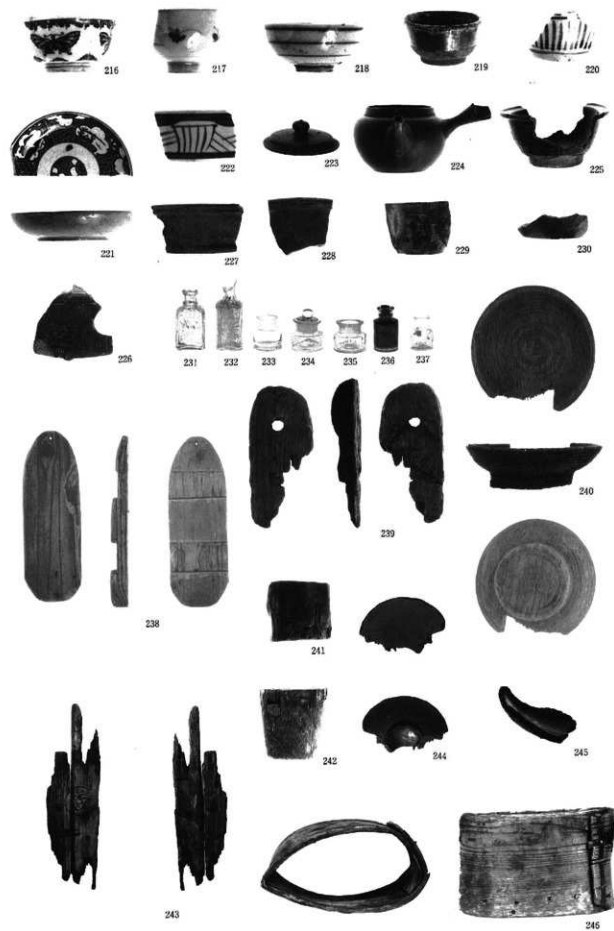
写真図版 10

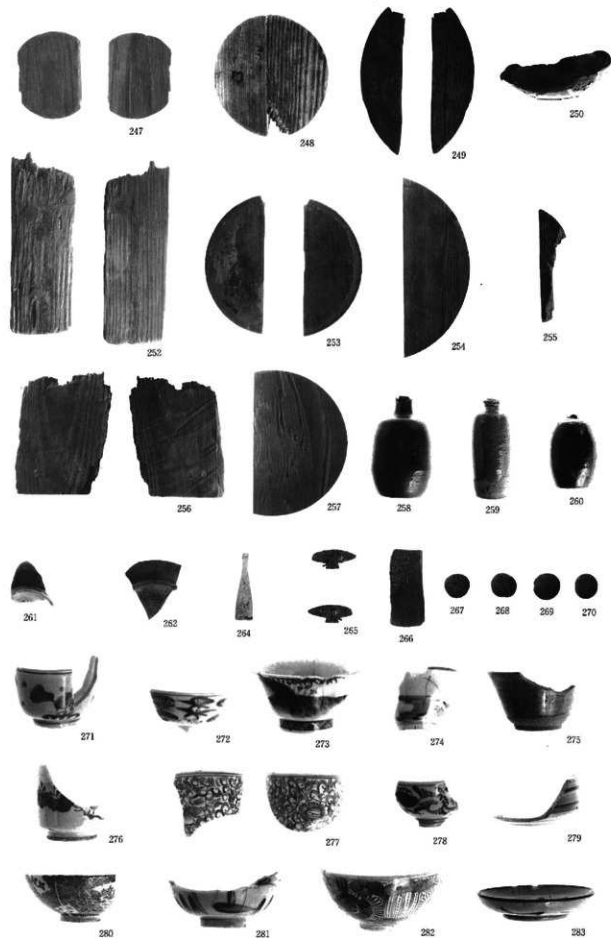


写真図版11



写真図版12





発掘調査報告書抄録

フリガナ	シンチョウ1イセキ
書名	真町I遺跡
調査名	高崎駅周辺（西口）土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（1）
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第141集
編著者名	神戸 肇・関口 修
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370 群馬県高崎市高松町1番地
発行年月日	西暦1996年3月29日
発行機関	高崎市教育委員会

フリガナ漢字名	シンチョウ1イセキ						
所収遺跡名	真町I遺跡						
フリガナ所在地	ダンマケンタカサキシシンチョウ						
所収遺跡所在地	群馬県高崎市真町						
市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査開始	調査終了	調査面積	調査原因
102020	264	361928	1390047	19950519	19950914	1518m ²	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真町I遺跡	水田跡	平安	水田跡	土師器・須恵器	洪水下水田跡
	水田跡	平安	水田跡		浅間B層石下水田跡
	水田跡	近世	水田跡	陶器・磁器	浅間A層石下水田跡
	集落跡	近世	建物跡	3 陶器・磁器 瓦質土器	と後世の溝・鉄線
			井戸跡	1 土師質土器	
			土坑	16 木製品	
			溝・水路	12 キセル、金具	SD1は「違偽」と見られる大規模な堀跡
			堀跡	2	
			土原跡	1	
		近代	礎石建物跡	1 陶器	
			礎立柱建物跡	2 磁器	
			土坑	10 ガラス瓶	
			溝・水路	6	SD2は貯水施設
			堀跡	2	

高崎市文化財調査報告書第141集

真町I遺跡

編集 高崎市教育委員会

文化財保護課埋蔵文化財係

発行 高崎市教育委員会

印刷 上武印刷株式会社

平成8年3月 印刷発行

